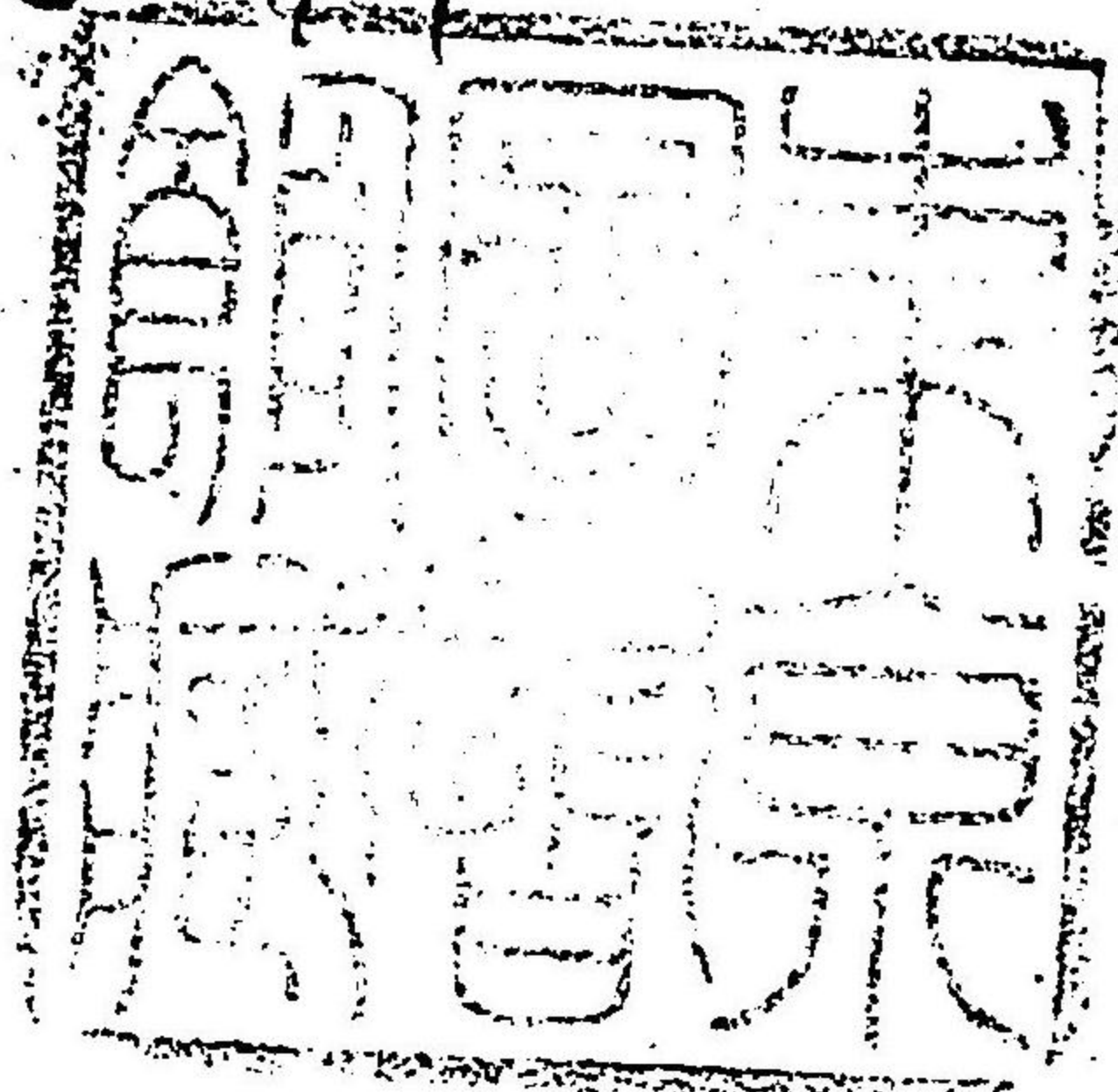


E-45-79

70-137



70
137

Dante has been here; as neither I nor any of the Brothers recognized him. I asked him what he wished. He made no answer, but gazed silently upon the columns and galleries of the cloister. Again I asked him what he wished and whom he sought; and slowly turning his head, and looking around upon the Brothers and me, he answered, "Peace!"
— Hilary.

70
137

求安録目次

上の部

悲嘆……………二丁

内心の分離……………二丁

脱罪術 其一 リバイバル……………二十四丁

脱罪術 其二 學問……………三十三丁

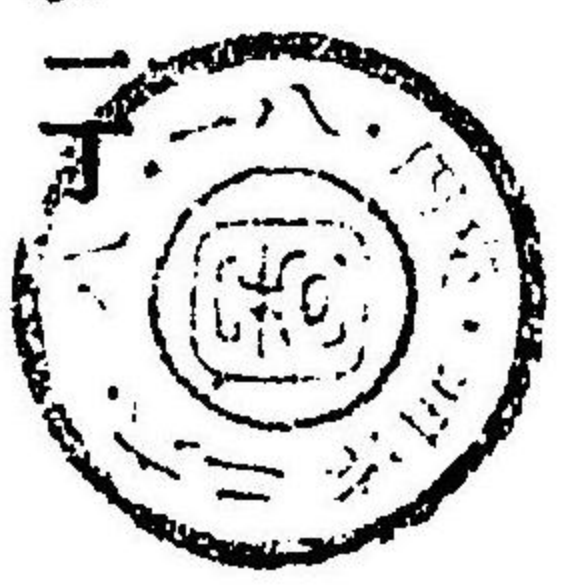
脱罪術 其三 自然の研究……………三十六丁

脱罪術 其四 慈善事業……………四十丁

脱罪術 其五 神學研究并に傳道……………五十四丁

忘罪術 其一 「ホーム」……………六十九丁

忘罪術 其二 主樂説……………七十二丁



忘罪術 其三 樂天主義

八十二丁

下の部

罪の原理

九十七丁

喜の音

百二十丁

信仰の解

百廿八丁

樂園の回復

百四十三丁

贖罪の哲理

百七十八丁

最終問題

二百二十丁

自序に代ふ

口あみて腸みせる柘榴かゝる。

芭蕉翁

爾正よ歸ん時其兄弟を堅せよ。

基督(路可傳二十二章)

我これらの望を既よ得たりと言ふ非だ、亦すてに
全せられたりと言ふ非だ、或ハ取ことあらんとて
我たゞ之を追求む、キリスト之を得させんと我を
執へ給へる也。兄弟よ我みづら之を取りと意ハ
ぞ、惟この一事を務む、即ち後よ在ものを忘れ前

二
に在るものを望み、神キリストイエスは由て上へ
召て賜ふ所の褒美を得んと標準に向ひて進み

保羅(腓立比書三章
十二、十三、十四節)

東肥託摩ヶ原流寓に於て

内村鑑三

明治二十六年六月七日

70
137
求安録 上の部

内村鑑三著

悲嘆

人は罪を犯すべからざるものにして罪を犯すものあり、彼の清浄たるべき義務と力を有しながら清浄ならざるものあり、彼の天使となり得るの資格を供へながら屢々禽獸と迄下落するものなり、登ての天上の人とかり得べく、降つての地極の餓鬼たるべし、無限の榮光、無限の墮落、共に彼の達し得る境遇よして、彼の彼の棲息する地球と同じく絶頂 Zenith 絶下 Nadir 兩極點の中間に存在するものなり。降るの易くして登るの難く、降れば良心の責むるあり、登るに肉慾の妨ぐるあり、我が願ふ所のもの我これを行さず、我が悪む所のもの我これを行し、我の二個の我より成立するものにして、一個の我

11
の他の我と常に戦ひつゝ、あるものなり、誠は實に此一生の戦争の
世なり。

セチカ督て親友ルシラスに書き送て曰く、

Vivere, mi Lucili, militare est.

(我がルシラスよ我も取りては生るは戦ふあり)
と、人生を以て快樂と言ふもの難ぞ、我も一日の虚日あるなし、
關ヶ原ウオーマラーの日々我わが心中に目撃する處なり。
督て聞くシモン＝パンヤンの屢く犬猫の境遇を羨みて止まざりき、
その犬猫の人の戦ふべき戦を有せざればなりと、人各々不満あり、
彼の思へらく、我も富あらしめば我足らんと、而して富彼に來りて
彼尙は平安を得ず、我も善良なる妻ありせば我足らんと、彼に幸福
なる家族あるありて彼尙は足らず、人の内部の欠亡を認めずして之
を外部に認め、内を満たさんとせずして外も得んとす、我の敵の我

ある事を知らずして、内に存する苦痛の外に漏らさんとす、爾曹の
中の戦闘と争競の何より來りしや、爾曹の百體の中に戦ふ所の怨よ
り來りしに非ずや(雅各書第四章一節)、然り世の始めより今も到る迄
渾ての戦、渾ての争の原因を究め見よ、皆悉く怨の戦争よして、自
己の不満を他人の上に洩せしものなり。
博士ムンゲル氏言へるあり。

"The unrest of this weary world is its unvoiced cry after God."—Munger.

人世の不満の神を求むる無言の聲あり、

我等神を得て始めて安し、世の最大幸福を求めつゝ、ありて未だその
最大幸福あるもの何たるを知らず、我等をして再びウエスレーの
言を重複せしめよ、

何よりもよき事の神我等と共に在す事なり。

内心の分離 Internal Schism.

余の始めて基督教に接するや、余の其道德の高潔なると威嚴あるに服したり、余の余の不潔不完全を悟りたり、余の言行の聖書の理想を以て裁判されるに實に汚穢云ふに忍びざるものなる事を發見せり、余の泥中よ沈み居りしを悟れり、余の故意を以て人を救きながら余の罪人なるを知らざりし、余の虚言を吐くを以て意を介せざりき、余は他人の失策を見て喜び、他を倒しても自己の成功を願へり、余の目的の高名富貴ありき、余の國を愛すると揚言しながら余の野望を充たさんとせり、余の他人の薄情卑屈を責めながら自分も常に他人の不利益を望み、余の君子振りて實の野人なりき、余の目的の卑陋なりし、余の思想の汚穢ありし、是を思ひ彼を思へば余の實

に自身に恥て若し穴あれば身を隠し神にも人よりも見へざらん事を欲せり。

然れども後悔先に立ず、今より改めて善人となるべきのみ、「天に在す爾曹の父の完全が如く爾曹も完全すべし」(馬太傳第五章四拾八節)、余は大いに心を決して曰く、「余の今より全く余の言行を改むべし、余の再び決して虚言を吐かざるべし、余の決して他人を評し他人を悪口せざるべし、余の情慾を慎むべし、余の懶惰ならざるべし、余の徳を以て恨に報ゆべし、余の功名心を根より断つべし、余の謙遜なるべし、余の酒も煙草も芝居も廢すべし、余の驕らざるべし、余は日曜日を清く守るべし」と、余の實を全然たる改革を宣告せり、而して獨り心を決するを以て足れりとせず、余の友人に向て余の決心を宣告し、天地を誓ひ、會衆に約し、完全無欠の生涯を送らん事を断決せり、教師之を聞て喜び、友人の余の改心を祝せり、余の思

へらく余の復生せりと。

ひとたび堅く定めしもの

動きのせじと我の思へり

余の一二ヶ月間余の決心を實行せり、余の實は新らしき人となりたり、余の改心の非常なるものなりと人も思へり、我も思へり、余の神の余よ近きを感じせり、余の朝夕の祈禱の長くして熱心なりき、余の言語の少くして重味ありき、余の謹慎の余の友人の厭ふ程ありき、昨日迄の「オシヤペリ」の今日の沈黙家たり、語るに涙あり聖書の引用あり、絶間なく祈り絶間なく讚美し、余の實は純然たる聖人とあり、エノクの如く神と歩めり。

然れども此製造的の神聖の長くの續かざりき、忽ちにして余の言行の後戻りし始めぬ、余の謹慎の余の友人の思みしのみならず、余も阻勉を以て暫時持續けしものなれば、數日にして余の不自由と苦痛

を感じせり、少小の豪遊何を信仰の妨害たるべけんや、沈黙の氣鬱病を導くの恐れあり、余の常に石像の如くよあるべからざるなり、警備一方に緩みはじめて全部壞れたり、三ヶ月を経ずして余の決心以前に余よ復せり、今の余の基督信徒たるの徴候の冷淡ながらも日曜に信徒の集會に列すると、イヤ／＼ながらも朝夕頭を伏て意味なき祈禱をなすよ止まりたり。

然れども永遠の生を有する心霊の聖經の刺詞を感じざるを得ず、「人の罪を定むること勿れ、恐くば爾曹も亦罪に定められん」(馬太傳七章第一節)、——嗚呼之れ他を惡口すべからずとの教訓ならずや、余が友人と會する時、陰ながら人を批評するを以て第一の快樂とあし、特に彼の牧師、是の信徒の欠點を摘發して談話の好材料となすの、之れ聖書の大訓に戻り、明瞭なる普通道徳に反するの行狀にあらずや、多辯に對する聖書の誠は左の如し。

わが兄弟きょうだいよ爾等なんら多く師しとあるべからず蓋おほわれら師したる者の罰ばつを受うくること尤もつとも重おもしと知しればなり、われらの皆みなしべくおぼゆるを爲なせる者ものあり人もし言ことばに愆あやまちなくば是これまづたき是全ぜん人にんにして全ぜん躰たいに善ぜんを置おき得えるあり、夫それ我われ等馬うまを己おのれに馴しなはせんとして其その口に善ぜんを置おくときは其その全ぜん躰たいを馭よすべし、舟ふねも亦またその形かたちの大き且かつ狂風きやうふうも追おひる、
 とも小こ船ふねを以もつて舵かじり子の意いの隨まに之これを運はこばすなり、此このの如ごとく舌したも亦また小こさきものにして誇ほこること大だいあり視みよ微火ゆづりのひいかに大だいなる林はやしを燃もすを、舌したの則すなはち火ひすなはち惡あくの世界せかいなり舌したの百體ひゃくたいの中なかに備まはりありて全ぜん躰たいを汚けし又また全ぜん世界せかいを燃もすあり舌したの火ひの地獄ぢごくより燃もへ出す、それ各類さまじくの獸禽けものとり昆虫ちゅうぶつ海うみにあるもの皆みな制せいを受うくまた既に人ひとに制せいせられたり然されど人ひとたれも舌したを制せいし能あたはず乃すなはち抑おさへがたき惡あくにして死し惡あくの充みてるもの也、我われ儕ら之これを以もつて主しゆなる父ちちを祝いほひまた之これを以もつて神かみの形かたちに像いたりて造つくられたる人を詛のろふ、祝いほと詛のろ一いつつの口くちより出いづわが兄弟きょうだいよ此このの如ごときことのあるべきにあらず。

(雅各書第三章從一節至十節)

余われは之これを讀よむ毎ごとに鑿のみを以もつて余われが良よ心を穿くたる、心地こころちせり、Speech is silver, Silence is golden. (若もし雄辯いびんの銀ぎんあれば沈黙ちんもくは金きんなり)、人ひとの二個ふたごの耳みみを有あし一箇ひとこの口くちを有あするの二度ふたたび聞きて一度いちど語かたれとの謂いひなりと、Think twice, speak once (二度ふたたび考かんがへて一度いちど語かたれ)、楠正成くすねまさなり曰いはく「衆愚しゆぐの悞あやまち々あやまちたるの一ひと賢けんの唯ただ々に如ごとかずと、余われの不完おんかんぜんなる余われの頑愚ぐんぐあるの余われが余われの口くちを支配しはいする能あたはざるに依よりて明あきらかあり、余われにして余われの多辯たひんを制せいする能あたはざれば余われの基督きりすと教くわうの何なんの用ようかある、余われの神かみの唯一ただひとなりと信しんず、如此かく信しんするの善よし惡鬼あくきも又また信しんじて戰慄せんりつけり(雅各書二章十九節)、余われよして此この明白めいばくなる基督きりすと教くわうの訓誡くんがいを犯かしなから世人せいじんに向むかつて罪つみの懺悔ざんげを勸すすめ神かみの裁判さいばんを説教せきくわうするとの余われの鐵面皮てつめんぴもこ、に至いたりて其極きよくに達たつせりと云いつべし、然しかり余われの大偽善者だいつぜんしやたるを感かんせり、余われの余われの行こうを改あらたむる迄までの何

の面目ありて他人に基督教を説くを得んや。
 聖書の曰へり、凡そ兄弟を憎むもの即ち人を殺す者なり、凡そ人を殺すもの窮りなき生命その衷よをることなし此の爾曹の知るところ也(約翰書第一書三章拾五節)、余始めて之を讀むや酷に過たる言と思へり、然れども能く其意を探ぐるに於て最も當を得たる言なるを知れり、カインの其弟アベルを憎て彼を殺せり、殺人罪の憎惡の結果なることの歴史と事實の証明する處あり、而して天道は人を罰するに當て罪の結果を以てせずして之に至らしめし意志を以てするなれば、神より人を見給ふ時の意志を執行するもせざるも差異あるべきにあらず、憎惡の情を發表して殺害に至らしむるも然らざると其人の教育境遇祖先より受けし遺傳等に由るものなり、昔時の唐王の如く彼を支配するの法律と社界の制裁なく、彼を威嚇するの宗教なきとき、彼の憎む人の彼の殺せしあり、シモンパンヤン曾て刑場に引き行かる、罪人を指て曰く、「若し神の恵に依らざりしならバ彼の罪人のシモンパンヤンなり」と、憎惡の念余に存すれば余に殺人罪を執行するの危険あり、而して神の裁判に引渡さる、時の殺人罪の宣告を受くるとも余の何を以て余を辯護せんとするや、而して余の靈よ、汝の人を憎みし事なきや、汝の人を憎みつゝあるにあらずや、「凡そ兄弟を憎む者の即ち人を殺すものなり、汝人殺よ如何よして汝の汝の罪より免かれんと欲するや。」
 聖書の言へり凡そ婦を見て色情を起す者の中心すでに姦淫したる也と、而して此標準を以て判決せらる、時の丁年以上の男子にして何人か能く姦淫罪より免かる、を得んや、「我より退け汝姦淫を犯すものよとのエホバの宣告の誰の受くべきものあるや、他人の淫行を摘發すると雖も自己の中心已に姦淫病の骨からみとして存するを如何せん、人の他人の病重さを見て自己を無病と信せんと勉むるものあ

り、見よや世よ、社會風俗の壞亂を發くに於て最も熱心なるもの、多いの自身敗徳の人なる事を、我の稅吏の如く民を虐げずと云て自己の無罪を神の前に建てんとするバリサイ人の心の普通人間の心なり、他人の罪あるの自身の罪なき証にあらす、自身已に梅毒を心よ醸しながら他の梅毒患者を罵りその醜態を摘揚して意氣揚々たるの愚者の誰なるぞ。

汝盜む勿れとの誠も能く聖書の原理よ基ひて探究するならば我の破らざる誠よのあらざるなり、盜との竊盜強盜をのみ云ふよあらすして總て天より我よ賦與せられざるものを我物とするを云ふなり、我萬人よ秀づる才と學とを有せざるは、或の友人の保庇に依り、或の諂媚の方便を以て、我の保つべからざる官職を保つに至れば我の其官と其給とを盜むものなり、神我を傳道師として造られざりしに我自ら傳道の職を取り、其尊嚴と威力とを使用すれば我のエリの子供

と均しく傳道職と之よ伴ふ榮譽とを盜みしものなり、(撒母耳前書二章二十二より二十五迄を見よ)、神を崇め國家に盡さんが爲めよ我に與へられし此貴重なる生命と時間とを己が快樂の爲めに消費するものも亦盜人にあらずして何ぞや。
 貧苦に責められ、饑餓に迫りし老母と愛兒とを救はんが爲めよ心ならずも隣人の單衣一枚を盜みしものも社界の法律てうものを設けて罰すると雖も、白晝に公然と法律の保護の下に貧者を虐げ國家の富を掠奪しつゝ、ある無數の盜人の措て問はざるなり、國家の犯罪人中十中の八九の盜人なりと、然れども人類が未來の裁判を受くるよ及での竊盜罪を犯さざるものとしての實に寒々たるならん。
 余の偽善者なり、人を殺すものあり、姦淫を犯すものなり、盜人あり、而して聖書なる電氣燈を以て尙も余の心中を探るからば余の神を誦すものからん、人を欺くものならん、——嗚呼聖書の言をして誤

謬ならしめよ、余の如斯光輝に堪ゆる能はざるなり。

余の罪の罪たるを知らざりし以前に罪を犯すも左程の苦痛を感せず
りしが、罪の惡むべき事、罪の懼るべき事、罪の罪たる事を知りし
後の罪を犯せし時の名状すべからざる不快を感ずるに至れり、而し
て罪の特性たるや、我等に懼怖を興ふると雖も我等をして之を避く
るの力を興へず、我等の罪を犯して歎じ、歎じて怖れ、怖れて失望
し、失望して又同じき罪を犯すものなり、米國產ラットルスチーク
(毒蛇の名)の木鼠を獲んとするや、その尾を振り、其口を開き、木上
にある木鼠をして危険の念を以て震動さしめ、終に自ら下て毒蛇の
口中に投せしむると云ふ、我等の罪は於ける亦同じ、罪の怖るべき
を知て反て益々其罪を犯すに至る、恰も絶壁の上より立つ時の身を千
仞の下に投せんとする念の起るが如し、此經驗を有せざる無慈悲の
教役者の弱き信徒の罪を敲くのみを以て彼等を救へんと思へり、余

も此心靈の救醫師の爲めへの懼るべき危険に陥りし事數度なりき。

余をして罪を犯さしむるもの余は存する罪のみにあらざるなり、
余の罪に沈める此世界に來り、未だ神を信せざる此國に生れ、余の
境遇余の社會の余を罪に導くものあり、虚言を吐かざれば事務を辯
じ能はざるの場合あり、余にして真正直を言はんか、余一人の不利
益あるのみならず他人に迷惑を感せしむることあり、如斯時に當て
虚言を吐かんと欲すれば良心の責むるあり、欲せざれば事の辯せざ
るあり、行て教導師の意見を問へば、彼等の云ふ君如斯社會を去れ
よと、然れども基督信徒の悉く牧師傳道師たるべきにあらす、教役
社會に身を投じて行を清ふするより易きなし、然れども我の天職
よして學術殖産商業等にありと信する時の我の今日の位置を去るべ
きよあらず、罪を犯して天職を全ふせんか、或の身を清くするのみ
を以て我一生の目的とせんか、嗚呼未信徒社會の中に在て基督教的

の生涯を送らんとするもの、苦と涙の、彼の聖書を小脇に挟み祈禱
會と演説會と説教會を主とするを以て永遠より定められし天職と信ず
る羨むべき人士の迎も推察する能はざる處なり。

我若し仁道を以て世に對せんとすれば世の詐欺を以て我を向へ、彼
我に裏衣を求むるに依て我が外衣を彼にとらすれば彼の尙ほ我の靴
をも帽をも求む、彼我に對するに不正なるが故に我彼を報ゆるに不
正を以てすれば彼我を責むるに我が信徒たるが故に正なるべきを以
てす、彼の不信者なるが故に不正を爲すを以て正當なりと云ひ、我
の信者なるが故に不正を爲すべからずと思へり、我の基督を信する
の我をして不信者社會よ於て最も預り易きものとせり、我の正直の
我をして彼等の便具とあし、我の良心の命を重する事の我をして偽
善者の好敵手となせり、我若し彼の不正を責むれば、彼の云ふ汝の
愛心を以て之を恕せよと、彼我を欺きて我に約を結ばしめ、而して

后基督信徒たるの義務として此約を履行せしめんとす、我若し約を
破れば彼は神と人とを欺きしものとして我を訴へ、我は詐欺者とし
て、姦淫をなせしものとして、教會の裁判に渡さる、世に助けなき
もの、中よ自己の罪を感じる基督信徒の如きものあらじ、而して
世よ力強きもの、中に罪を感ぜざる基督信徒所謂勝るものかし、
前者の戦々競々何事をも爲し能はず、後者の大胆不敵何事をも爲し
得べし、罪より救はれんとするものも基督教會に來れ、正義と神聖
との後楯を以て罪を犯さんとするものも基督教會に來れ。

如斯社會如斯教會に於て我儕罪を犯さざらんを欲して犯さざる
を得ず、恰も戰國の世に生れし人の戦争の罪なりと信ずると雖も戦
ひざるを得ざるが如し、我の罪を犯すものよして罪を犯さしめらる
るもの (Sinning and sinned against) なり、我の神と争ふものよして神と争ひ
ざるを得ざるものなり、若し罪を犯さざるもののみが天國に入るを

得るとならば地球の人を天國に送り出す處にあらざるが如し。
 惡を爲すの罪に加ふるに善を爲さざるの罪あり、即ち Sin of Commission
 and Sin of omission なり、監督教會祈禱文懺悔の語曰く「我等の爲すべき
 事を爲さず爲すべからざる事を爲せり」と、基督教の道徳の惡を避く
 るを以て満足せずして進で善を行ひしむ、「汝所不欲勿施人」と言
 ずして「凡て人に爲られんと欲することは爾曹また人にも其ごとく爲
 せ」と言へり、我等の退て己を守るべきのみにあらずして進で人を救
 ふべきなり、基督教の教義に由れば自己のみを救へんと勉むるもの
 の滅亡に至るの人なり、懶惰の罪中の罪なり、何事をも爲さざるの
 惡事をなすなり、時を殺すも人を殺すが如く同じく罪あり、功なき
 の一生の罪の一生あり、フランクリンハ言へり時の金なりと、基督
 教の言ふ時の永遠の一部分として億萬心靈安否を決するの機ありと、
 (Ton Kairon) 以弗所書第五章十六節参考)我が憎惡の念を充たさんが爲め

よ人を死に至らしむるも殺人罪なり、人の永遠の滅亡に至るを手を
 束ねて傍觀するものも亦殺人罪と與からずと言ふを得ず、神豫言者
 以西結に告て曰く、

人の子よ我なんぢを立て、イスラエルの家のためよ守望者とな
 す、汝わが口より言を聞き我にかはりてこれを警むべし。我惡
 人に汝かならず死ぬべしと言ひんに、汝かれを警しめず、彼を
 いましめ語りその惡き道を離れしめて之れが生命を救はずば、
 その惡人のおのが惡の爲めよ死なん、かれど其血をば我れなん
 ぢの手よ要むべし。然ど汝惡人を警めんよ彼その惡とその惡し
 き道を離れずば彼のその惡の爲めよ死なん、汝のかのれの靈魂
 を救ふなり、又義人その義事をすて、惡を行かんに我れ贖
 をその前にかかば彼は死ぬべし、汝かれを警しめざれば彼のそ
 の罪の爲めよ死てそのおこなひし義しき事を記ゆる者なきにい

たらん、然れば我れその血を汝の手よ斐むべし。然れど汝もし義しき人をいましめ義しき人に罪をかさしめずして彼罪を犯すことをせずの彼の警誡を受けたるが爲めにならずその生命をたもたん、汝の心の霊魂を救ふあり。

以西結第三章拾七節より二十一節迄

我の我たり爾の爾たりとの無情なる世界の精神の基督教の許さる所なり、神の我等の手より悪人の血を要め給ふなり、兄弟の罪を犯すの我等の罪を犯すなり、人類責任連帶論の基督教の教義にして近世社會學の結論なり。

汝の汝の責任を盡せしや、又盡しつゝあるや、「我知らず我に我弟の守者ならんや」とのカインの答をして汝の答たらしむる勿れ、汝日曜日を守りたるとして、汝の他人を苦しめずとして、汝の責任を盡したりと云ふべからざるなり、懶惰の罪、無情の罪、不注意の罪、

積極的の罪と消極的の罪、爲すべからざる事を爲して爲すべき事をあさず、汝如何にして來らんとする刑罰より免かれんとするや。

如斯にして神の靈を以て我が心を詮議さる、時の我の隠るゝ所なきなり、我が人の前に表白し能はざるの罪も神の前よの顯明なり、我の汚穢なる感情、我の卑陋ある思想、人知れずして犯せし罪、未だ人の知らざる我が心中の欠点、——嗚呼我の之を如何せん

たとひ我れわが愁を忘れ面色を改めて笑ひ居らんと思ふとも、尙ほこの諸の苦痛の爲めに戦慄くあり、

我れ思ふに汝我れを釋し放ちたまはざらん

我れは罪ありとせらるゝなれば何を徒然に勞すべけんや、

われ雪水をもて身を洗ひ

灰汁を以て手を潔むるとも、

汝われを汚らしき穴の中に陥しいれたまはん、

而して我が衣も我を厭ふにいたらん。

(約百九章二十七節より三十一節迄)

われ我罪も耻て神より過がれんとするも神の我を通し給はず、我の
エホバの的とあり、彼の矢われもあたり、彼の手わがうへを壓へた
り、(詩篇三十八〇二)我東に行くも彼のあり、西も行くも亦彼を見る、
神の裁判の神よして宥怒の神にのあらざりき。

罪に責られて余の全く生涯の快樂を失へり、食事進まず、夜眠の妨
げられ、事を爲す氣力なく、唯恐怖を以て震へながら日を送りたり、
苦痛の余り余は一日教師の許を訪ひ、幸ひ二三の有名なる教導師の
居合せたれば耻を忍びて余の心中の苦痛を吐露し彼等の援助を乞ひ
んことを求めたり、然るに全く余の希望に反し彼等の内一人も余の
要求に應ずるものなく、三人均しく答て曰く、余輩如斯經驗を有せ
ずと、而して少しも余を省みざりき、余の心中の煩悶を表白せしを

耻じ、余の思慮なきを歎じ、失望に沈みて家に歸れり。

天路歷程の記者ジョージ・バンヤン未だ宗教上の事と關して雲霧の中
に彷徨するや、一日懷疑止む能ずして近隣の一教師を訪ひ彼の心事
を吐露して教師の慰めを得んとせり、バンヤン曰く余の心中に惡念
かぎりなく湧出するの正しく余が神に捨てられ悪魔の奴隸となりし
徴候あらんと、教師之を聞て嘆じて曰く多分然らんと、過敏なるバ
ンヤンの失望の上に尙は一層の失望を加へ、殆ど立つ能はざるの位
置に至れりと、彼年を経て基督に於ける平和を得し後彼の友人に告
て曰く、彼の教師の神學の委しき人なりしなれども未だ悪魔との
經驗に於ては乏しかりし人ありしと。
爰に於て罪なる大問題の解折に就ては余の何人にも頼るべからざる
を了れり、余の獨り此解譯を試みんと決せり、人の罪より免かれ得
べきや、免れ得るとならんば其途何處あるや、この心中の苦痛より

免かる、よあられされば余の何事もあし能はざるなり。

脱罪術 其一 リバイバル

時に報あり余よ告て曰く、某教會に聖靈の降臨ありて數多の信徒の罪の赦を得、歡喜滿ちみちて惠の神を讚美すと、實に昔時のペンテコステ我國に顯のれ、小女の非常の雄辯と才能とを以て福音を老成人に傳へ、頑老の罪を悔て赤子の如しと、非常の力あり、非常の感動あり、非常の改宗あり、非常の歡喜あり、何事も非常あらざるのみしと。

余の此報に接して懷疑の念頻りに起れり、余の生理學と心理學との是等の顯象を以て神經作用に歸したり、余の或る寺院に於て一尼が猫を真似してより全衆舉て此尼に倣ひしを聞けり、而して交感神經過敏の時よの我等豫想外の出來事を目撃するの決して怪むに足らざるを知れり、故よ余の學者の精神を以てリバイバルの席に至れり、而してこれを目撃するに當て余の理性の益々余をして冷淡からしめたり、リバイバル家の謂ふ所に依れば、聖靈火焰の如くに来り、何時來るとなく、何處より來るとなく、信徒の心中に一種異様の變動を生じ、忽にして苦痛死に至らしめんとするが如く、彼爲めに叫號して神の援助を乞ふに至る、かく病む事或一夜或二三晝夜或一週間、天上より聲あるが如くよして、罪人の罪の赦され、苦痛の散じ、歡喜一時に來て手の舞足の踏む所を知らざるに至ると。余の會堂に至るや二三の兄弟余を取巻き速に聖靈を受くべきを勸じ、彼等の熱涙を流して余の爲めよ祈り呉れたり、而して彼等の言語の

真情より出づるが如く、余をして知らずくもらひ泣をなさしめたり、彼等の謂ふ所余の實驗に的中せし事多し、罪の罪たる事、罪人に永遠の刑罰ある事、悔改の必要等の悉く余の衷心を打てり、殊にリバイバルを主張し或之を賛成する人の時の有名なる學識才能を有する教師なりければ、余の益々その輕すべからざるを了れり、余の生理學上の反對の段々と薄らぎたり、余の沙翁の言を思ひ出せり、

There are more things in heaven and earth, Horatio,

Than are dreamed of in your Philosophy.—Hamlet, I, 5.

カーペンター、ハックスレー、ゲゲンバウル必しも宇宙の全眞理を有せざるなり、余の心中の苦痛を癒すの途の一にリバイバルにあるならん、他の兄弟の得し恩澤何ぞ余も得る能はざらんや、彼等の言ふ「祈れよさらば聞かれん、門を叩けよさらば開かれんと、余も全心全力を盡し神に縋り付て祈らば此特別の恩化余の上に来り、心中の

罪の飛散し、憂鬱は霽れ、忽にして無辜快樂の身とあらん。

余の祈り始めたり、而して一日待てども恩化余は降らず、二日祈れども心中別に異状なし、行て教師に問へば曰ふ、君の熱心の足らざる故なりと、依て余の無理に泣き無理に叫び恩澤に浴せんとせり、然るよ好果少しもあるなし、余は歌へり、

主よ主よ 聞きたまへ

ほかびとすくふに かせわれも

余の終に失望せり、余の余の罪の普通人の罪に勝りて多ければ神の余に聴かれざると思へり、他の兄弟姉妹の天よりの特別の御恵に就て互に喜び共神に感謝しつゝあるに、余一人の孤兒の如く、拾兒の如く、感謝すべきの恩恵なく、表白すべきの歡喜なく、神を捨てられし如く思ひ憂鬱の上よ憂鬱を加へ、懷疑前日よ十倍せり、而して時の教勢たるリバイバルを受けざるもの信徒にして信徒にあら

ざるが如くなりし故、余の自然と信徒社會を避け、教會の余を厭ふに至れり。

此時に當て余を信仰上の大失敗より救ひしもの余の有せし至少の科學上の智識ありき。

余の曾てリバイバルに就て論じて曰く

昔時未だ科學の進歩せざる時に當ては宇宙萬物の進化變動を了解せんとするに悉く急變的の顯象を以てせり、其地球創造を講ずるや學者の悉く Catastrophism 説即ち急變説を維持せり、該説の論ずる所に依れば人類の棲息する此地球の僅々六日間に神の非常の力に依りて造られたりと、又或の此六日を以て各々二十四時間づつ、の日と見做さるる人に於ても一期毎に大急劇變動ありしを説き、或の大地震の爲め、或の大洪水の爲め、短時日間に人の衣服を變ずるが如く地球の表面に天變動を來せし事を説けり。

然るに今世紀の中頃、當て英國の碩學ライエル氏の地質學上急變説の信すべからざるの理由を論じ、地球の僅少年間の急造物にあらずして其今日に至りし迄の來歴の畧は今日人類の目撃しつつ、ある自然現象の作用に依て進化せし者なることを説明せり、後ダーウキン氏をして動植物進化論を思ひ起さしめしもの實にライエル氏著述地質學の原理(Principles of Geology)なる書ありと云ふ、而して進化論の實に思想界を一變し、延て神學界も及び、彼のバウル氏の一派即ちチューピングン派の神學の如きの進化説を神學上も應用せし極端と稱するものなり。地質學上生物學上急變説の排撃せられたり、急變説の社會學よりも歴史學よりも退けられたり、而して余輩の思考の結果として、觀察の結果として、心靈上實驗の結果として、宗教上も於ても急變説は價值を置かざるものなり。

基督の「初」の苗つぎも穂いで穂の中も熟したる穀を結ぶ馬可四〇二十八なる語の心霊の發達を以て植物發生の順序に比べたるものにして全く急劇的の變動に反せり、馬太十三章三十一節以下芥種の譬并に麩醗の譬の共に進化的の發達を示すものにして急變的の意の存するなし、基督の彼の教會の建設并に勝利を以て數千年の後に期せり、熟思以て四福音書を研究する人の基督自身の語より心靈并に教會の進歩に關して、菌類の一夜に生ずるが如き、富士山の一夜に突出せしが如き、一時速急の生長を示せる意を解する能はざるなり

眞理の余輩の呼吸する空氣の如く、余輩の日常飲用する水の如く、其効果の確固あると同時に其働らさの靜かにして運きものなり、眞理は劇薬にあらざるなり、
 眞理の芥種の如くよして永遠に迄生長するものあり、基督の救なる事の眞理あり、ルーテル之を聞て起ち、バンヤン之を聞て始めて安し、然れどもルーテルをしてルーテルたらしめたるの單に師父スマウピッツの一言に由るにあらすして尙ほ三四年間寺院内よ於ける單獨の思考と祈禱とを要せり、感情的のバンヤンに於てすら彼救罪の大眞理を悟りしより尙ほ十二年間ベツトホルド監獄内の鍛鍊を要せり、大眞理を得しときハ之を感ずると感ぜざるに關せず余輩の一大進歩せし時なり、之よ反して如何程感情を起すとも、如何程涙を流すとも、余輩の理性を動

かさいるの變動の遠からずして消て跡なきに至らん、聞く十六世紀のプロテスタント革命の成功ありし理由の合理的の革命として、感情的の革命もあらざりし故ありと、而して之に反し、カラフハ及びロエヨ等の天主教會内に起せし革命の感情的の革命なりしを以て百年を出でずして消絶たりと、感情的リバイバルを賛賞する人の常にウエスレー、ホヰットフィールドの功績を以てせり、然れ共余輩の見る所を以てすればメツヂスト派の祖先の今日人の稱するリバイバル家にあらざりしなり、ウエスレーの筆る冷淡なる建設的の政治家と稱するとも熱頭ある感情的の説教家と稱すべき人にあらざりしなり、氏の説教の筆る議論にして説教にあらざりしなり、以てメツヂスト教會の今日あるを徴するも足る、沈思熟考より生ずる感情の外、頼むべからざる感情と知て可ならん。

脱罪術 其二 學問

急劇的奇跡的變化の希望全く絶へて余の普通理達の示す法に依て罪の苦痛より免かれんとせり、而して余の以て頼むべき途と信せしもの専心以て學術研究に從事し罪てう念より脱せんとするもあり。罪より免かる、の一策の罪に就て思ひざる事なり、毒蛇を見詰る木鼠の終に自らその呑まる、所とあるが如く、人も罪より逃れんと欲すれば眼を罪より轉するも如かず、自己の罪を見認むるのよし、之を見詰るのよろしからず、罪を摘發し常に刑罰の念を示し置かば人の罪を犯さるべしとの觀念の法律家並に宗教家の屢々陥る誤謬なり、安息日毎に信徒の薄信を責めその欠点を算立つるならば信徒の自ら罪を悔い之を改むるに至るべしとの經驗なき若牧師の常と取る

方針あり、罪との悪むべきものよして慕ひしきものなり、怖るべきものよして心を奪ふものなり(創世記三章六節)罪の苦痛より免かれんとすれば罪を見ざるにしかず。

學に罪なし、我學ぶ時罪を覺へず、我書籍の中に埋まる時、我古人の深意を探らんとする時、二更夜静かにして洋燈の石油將に盡きんとする時、我に悪念を、卑想を、

Ach, wenn in unserer engen Zelle

Die Lampe freundlich wieder brennt,

Dann wird's in unserm Busen helle,

Im Herzen, das sich selber kennt.

Vernunft fängt wieder an zu sprechen,

Und Hoffnung wieder an zu blühen;

Man sehnt sich nach des Lebens Bächen,

Ach, nach der Lebens Quelle hin.—Goethe's Faust.

ダンテと共に三界に遊び、沙翁に由て人情に達し、ゲーテは導かれて思想界の宇宙を跋渉する時、我は下界の人ならず、我の我より解脱して眞聖人となりし感あり。

然れども之れ一時の感あり、以て我が永久の苦痛を醫するに足らず、學の我に新世界を開き之と共に新快樂を與ふると雖も又我は際限なき世の憂苦を示すものあり、我の學に由て苦痛の上に苦痛を重ねたり、ゲーテの近世文學界の王あり、世の飽き足らぬ程名譽を斯人の頭上に積み、然るも彼の表白して曰ふ、「余の一世中快樂と思ひし時の僅々四週日なり」と、彼の著述は係る Werther's Leiden(ヘルテルの悲)なる書の幾多の失意家をして自殺を行はしめたり、誰かシセローの博識雄辯あるを知て彼の絶望的の生涯を讀むに忍びんや、「世よ生れざるこそ最も大ひなる幸運なれ、其次位の幸福の成るべく速よ之れを離れ去らんことなり」との希臘の悲劇家ソフホクリスの語の我を愁殺

せしむるに足る、統計學者の曰ふ獨逸國に於て自殺を以て命を終るもの下婢の千人に對する四人にして學者の千人に對する六十人の割合ありと、即ち後者の前者の四倍にして厭世失意の多くの有識の人あり、最も危険なる異端、最も恐るべき懷疑の學なき農夫職工等に存せざるなり、幸福なるの無學なり、知らぬこそ佛あり、學の罪よりの隠場所よあらずして反て之を顯明ならしむるものあり。

脱罪術 其三 自然の研究

學の人爲あり故に我を癒すに足らず、我の人の造らざる自然に行かん、

"Pride often guides the author's pen;

Books are affected are as men;

But he who studies Nature's laws,

From certain truth his maxims draws,

And those without our schools suffice

To make man moral, good and wise."—John Gay.

誰か鳥類學者オーシニコポンの傳記を讀て彼の無玷純白なる生涯を賞嘆せざるものあらんや、アルプス山の眺望の中に養育されしルーイ
|| アガシこそ罪なき自然の子供として彼の一生の幸福の一連鎖たる
が如し、身軀虚弱あるダーウソンの博物學の研究の中に靜肅有益なる
一生を送れり、五百倍の目的鏡の下に細菌の發生を探研する時誰
か人生永遠の墮落を意に留むるものあらんや、罪、未來の刑罰、皆
不平人間の妄想あり、來て美麗なる自然と交れよ、鬱の散じ疑の解
けん。

余は罪の觀念を以て責めらるゝの苦しき一時の至く身を自然物の

研究に委ねたり、而して詐りなき自然物の虚飾的偽善的人造物と異り余を教へ余を慰むるに於て不尠功力を有せり、學者の未だ嘗て知らざる新動物を發見せし時の嬉しさ、煩困なる事實を單純ある一つの規律の中に包括せし時の快樂、萬物の順序あり、規律なり、和合あり、自然と交へるもの宇宙の運行と共に靜肅平和ならざるを得ず。

然れども自然の人靈及ばず感化力の受動的にして主動的にあらず、自然の喜ぶものには喜ばしく見へ、悲しむものには悲しく見ゆるものあり、東台の櫻花の萬人の歡喜を助くると同時は又無限の怨恨を寫すものなり、物の靈の婢僕としてその主たる事能のざるあり、歡喜と悲哀との我の心にあり、シナイ半島の茫漠たるも勝ち勇めるメリヤムにの高尚優美の讚歌を與へ、アルプス山の壯嚴あるも詩人バイロンの炎熱を冷却する能はず、瑞西國の山嶽ありてレイアガシ

ありしよあらず、天アガシを降してアルプス山の岩石の識化(intellectu-
lize)せられたるあり、南米の地質、ガルパズ島の動植物のチヤノ
スミダーウキンを造らず、天ダーウキンを送て進化論世界に普し、
靈は物を靈化し得るも物の靈を化するを得ず、自然物の我心中の病
を治する能のざるあり、その自然の生命の境遇よして其原因あらざ
ればなり、勿論周圍の有様の生命の發達に大關係なきにあらず、然
れども病若し生命其物に存する時の周圍如何程善良なるも之れを癒
す事能のざるなり、自然の病める靈魂を醫する上よ於て大助力たる
に相違なし、恰も清淨温暖なる空氣の結核病患者を治する爲よの大
効力を有するが如し、然れど腔内の黴毒の外用劑の達し得べきにあ
らず、罪てうもの若し心靈の病なれば之を癒すものは心靈的の力な
らざるべからず。

脱罪術

其四 慈善事業

此時は當て余の自己以外に援助の存せざるを悟れり、教師も教會も學問も自然も余の心中の痛を治する能はざるを知れり、余の自ら勉めて畏懼戰慄て己が救を全ふせむと覺悟せり(腓立比書二章十二節)、罪の位置の余の意志に存すれば余の意志を以て之に打勝つべきなり、余の罪に責めらるゝ、余の余の爲めにのみ余の思考を消費しつゝ、あれはなり、今よりの「我れ」なる念を全く去り、世の憐れなるもの貧しきものを救はんよのなとか余をして無私完全なるものとなし得べからざらんや、完全の安逸の中よ求むべからず、學海に棹すも墨水に舟を浮ぶるも快を求むるの精神に於ての一あり、狐を狩り出すも眞理を探り出すも探究の樂を目的とするよ至ての一なり、罪の私慾あり、私慾を離るゝの罪を離るゝあり、聖書の日のすや

全からん事を欲へ往て爾の所有を售て貧者よ施せ然らば天に財あらん(馬太十九〇二十一)

又

神なる父の前に潔くして穢なく事ることゝの孤子と寡婦を其患難の中に眷顧また自ら守て世よ汚れざる事なり(雅各書一〇二十七) 慈善の他人の爲めにのみにあらざるなり、完からんとするもの潔からん事を願ふものゝ自を慈善事業に投すべきなり、我等の物を與へて靈の賜を受くべきあり、然り宗教との慈善を云ふなり、貧しきものに盡すの神よ盡すなり、而して余に此觀念を注入せしものは詩人ローエルの作に係る「ラウンフホル公の夢(Sir Launfal's Dream)なる詩篇なりき、

ラウンフホル公の中古時代の名士にして一城の君主なりき、

彼の熱心の基督信者ありければ常に神と教會の爲めに大功を奏し以て忠實ある天主教徒の本分を盡さんと思ひ居れり、時よ彼の心中よ浮び出し一策の、曾て基督が彼の弟子等と共に晩餐の式を守られし時用ひられし金の盃にして今のその行衛を失ひたるものを探り出さんとするにありき、ヲ公思へらく此事實も救主に對し天主教會に對しての大事業なり、昔時より其探究に従事せし人尠からずと雖も一つも功を奏せしものなし、よし、我の今日より万事を放棄し身命を捨て、も此重寶の所在を尋ねんと、因て心を決し、別を故郷の人に告げ、甲を環し肥馬に跨り、勇氣勃々として彼の城門を出でたり、時に癩病を患るものあり、來て公の傍に伏しナザレの耶穌の名に依て差少の施與を乞へり、ヲ公音聲を荒らげて曰く余は皇天の命に由り救主の金盃を探り出さん爲めに旅出するものなり、爾汚穢物何ぞ我を煩ふすや」と、

病者の尙ほ袖に縫て施與を乞ふ、ヲ公大に悲り懷中より金貨一個を取り出し之れを地上に投じて曰く爾之を取れ我の爾を顧みるの暇なし」と、依て鞭を鞍馬に加へ顧みずして去る、是より數十年間ヲ公歐亞の諸國を經巡り危難を犯し丹精を盡し救主の金盃を探り求むるも得ず、終に貧困城主の身に迫り來り、彼又霜を頭上に戴くに至る、公青年時代の希望終に達すべからざるを悟り故國に販り餘命を父母の墳墓の土に終らんと決せり、公の再び城門に近くや身に綱縷を穿ち手に一杖を曳き、冬寒くして霜雪小川の水を氷結せし頃ありき、時に又癩病患者あり、其相を窺へば數十年前公の尙ほ壯ありし頃大望を抱ひて探究の途に就きし時彼の馬前に跪きし貧人なりき、艱苦困難の今や公の心を和げ、推察の情頻りに公の胸中に起れり、公今與ふるに金銀なし、依て携へし所の一個のパンを取出し之を半折して貧人

に向て曰く「余は今君に予ふるに只此パンあるのみ、今其半を君に呈す、ナザレの耶穌の名に依て之を受けられよ」と、又腰に挟みし手杓を取り、路傍に流れつゝ、ありし小川より下り、自ら堅氷を碎て一杯の冷水をくみ、癩病患者より與へて曰く「惠ある余の救主の名に依て之を飲め」と、乞食の患者より丁重ある「公の親切にあづかりつゝ、ありしが、忽にして彼の形を變じ、榮光ある基督となりて「公の前より立ち、手を伸して祝福を彼に與へ、清肅温雅言のんかたなく、感慨を以て襲はれたるラウンフォール公よ謂て曰く、

Lo, it is I, be not afraid!

In many climes without avail

Thou hast spent thy life for the Holy Grail;

Behold, it is here — this cup which thou

Didst fill at the streamlet for me but now;

This crust is my body broken for thee,

This water His blood that died on the tree;

The Holy Supper is kept, indeed,

In whatso we share with another's need;

* * * * *

見よ、われなるを懼るゝな、

聖き盃求めんと

諸國を巡るも益ぞなし、

見よ、さかづきのそこにあり

小川にくみし手杓なり、

さきて與へし其パンの

さかれし我の躰なり、

その冷水の十字架の

上より流れし我血なり、

貧○人○と○も○よ○す○
食○を○實○に○や○聖○餐○か○り○

ラ公驚き醒むれば之れ一場の夢なりき、公大ひも悟れり、神に盡し教會に盡すの天下を經巡り目覺ましき大功を奏するよあらず、世の貧しきものゝ基督あり、貧者を救恤するは基督の事なるなりと、因て爾來城門を開き倉庫を放て城下の窮民を養ひ以て公の一世の快樂となしたれば、國榮は民安んじ、公自らも平安と喜悅とを以て世を終へしと云ふ。

讀んで、に至て余の歡喜を以て充たされたり、余の完全は達する途を得たり、余の眞正の基督教を會得したり、余の慈善事業を以て一世の目的と定めたり。

爰に於て余の解剖書顯微鏡を打捨て、シヨンハワード、エリザベス、フライ、スチブン、ゲレ、ット等の傳記を讀めり、サラマーチ

ンの功績の余をして微力ながらも慈善家たり得るの獎勵を與へたり、ブリース氏の基督行績論(Gesta Christi)の慈善事業は顯ゆる、基督の勢力を示すものとして余の坐右を離れざる書とされり。

余の志を決して慈善病院に入りしや余の實に無常の快樂を感せり、鶏鳴未だ曉を告げざる前より起て病者の爲め衣食を整へ、その靴を取りその足を洗ひ、その僕となりその給仕人となり、發せんとする余の短氣を壓へ、熾んとする余の慢心を静め、以て偏に基督の温順と謙遜とに倣はんとせり、患者に靴をもて蹴らる、時、面部に唾せらる、時、余の之れを教主の忍耐を學ぶべきの機と思ひ、温顔を以て彼に對し、微笑を以て彼に報いたり、余の伊國の愛國者カボナロの言を思ひ出せり、

余の寺院に入りし忍ばん事を學ばん爲かり、艱難我に迫りし時の我の學者の眼光を以て之を學び、之をして常に愛し常は怒

すべき事を我に教へしめたり。

看護人となりて余の始めて短氣の無益にして有害あるを悟れり、余の温良の至大ある勢力を有する事を學べり、無限の忍耐のみが慈善家たり得るなり、白痴教育者として有名なるシエームス、ビー、リチャード氏曾て余輩に告て曰く、

汝一度試みて成功せずんば二度試みよ、二度にて足らずんば百度試みよ、而して尙は汝の目的を達するを得ずんば二百度三百度四百度五百度試みよ、寛大かれよ、一千度試みよ。

基督の言ひる、七十度を七倍する寛容との此事を言ふならん、實は忍耐なきものの慈善家たるべからざるなり、慈善病院の基督信徒の最好試煉所なり、之に堪ゆるもののみがナザレの耶穌の弟子たるあり、説教壇講義室共は信徒の眞偽を判分する所にあらざるあり。

慈善の天使の職たるは相違なし、慈善なきの宗教も道德も眞正なるものにあらざるあり、慈善の宗教の花なり菓なり、其國の慈善に依てその道義心の程度を察するを得べし、神社佛閣如何程壯嚴あるも孤兒をして饑に泣かしむる國民の君子國の名稱に與かるべからざるなり。

然れども慈善の善人を造るものにあらざるなり、慈善の愛心の結果にしてその原因にあらず、慈善事業に従事すれば自ら慈善家となり得べしとの觀念の事實らしく見へて事實にあらざるなり、心中已に慈善心の存する時悲哀に沈めるものを見て終に大慈善家とありし人尠からず、ジョン・ハワードが佛國の獄屋に繋がれし時その慘狀を見て終に監獄改良者とありし如く、ムーア氏がアルプス山中に盲目の少女が「ア、マリヤ」の祈禱を唱へつゝあるを見て終に盲人教育の先導者とありし如く、慈善の我等の心中に存する慈善心を鼓舞するものに相違なし、然れども噴水の水源の平面より高く登る事能はざる

すべき事を我に教へしめたり。

看護人となりて余の始めて短氣の無益にして有害あるを悟れり、余の温良の至大ある勢力を有する事を學べり、無限の忍耐のみが慈善家たり得るなり、白痴教育者として有名なるシエームス、ビー、リチャード氏曾て余輩に告て曰く、

汝一度試みて成功せずんば二度試みよ、二度にて足らずんば百度試みよ、而して尙ほ汝の目的を達するを得ずんば二百度三百度四百度五百度試みよ、寛大かれよ、一千六度試みよ。

基督の言ひる、七十度を七倍する寛容との此事を言ふならん、實に忍耐なきものの慈善家たるべからざるなり、慈善病院の基督信徒の最好試煉所なり、之に堪ゆるもののみがナザレの耶穌の弟子たるあり、説教壇講義室共、信徒の眞偽を判分する所にあらざるあり。

慈善の天使の職たるは相違なし、慈善なきの宗教も道徳も眞正あるものにあらざるあり、慈善の宗教の花なり葉なり、其國の慈善に依てその道義心の程度を察するを得べし、神社佛閣如何程壯嚴あるも孤兒をして饑に泣かしむる國民の君子國の名稱に與かるべからざるなり。

然れども慈善の善人を造るものにあらざるなり、慈善の愛心の結果にしてその原因にあらず、慈善事業に従事すれば自ら慈善家となり得べしとの觀念の事實らしく見へて事實にあらざるなり、心中已に慈善心の存する時悲哀に沈めるものを見て終に大慈善家とありし人尠からず、ジョン・ハワードが佛國の獄屋に繋がれし時その慘狀を見て終に監獄改良者とありし如く、ムーン氏がアルプス山中に盲目の少女が「アヘ、マリヤ」の祈禱を唱へつゝあるを見て終に盲人教育の先導者となりし如く、慈善の我等の心中に存する慈善心を鼓舞するものに相違なし、然れども噴水の水源の平面より高く登る事能はざる

が如く慈善も我心中に存する愛心も越ゆる事能はざるなり、若し愛心に越ゆる慈善を實行せんとすれば慈善の變じて偽善となり、慈善の快樂全く去て不平傲慢功名心等の惡靈來て再び我を惡魔に引渡すに至る、信仰不相應の慈善程危險なるものあり、慈善の幾多基督信徒の蹟石とかりし事の悲しむべき事實なり。

パリサイの人たちて自ら如此いのれり、神よ我の他の人の如く強索不義姦淫せず亦この稅吏の如くにもあらざるを謝す、われ七日間も二次斷食し又すべて獲るもの、十分の一を獻げたり。

(路加傳十八章十一、十二)

我をして自己を高ぶらしむるに至れば我の善行の我が敵なり、墮落の高き程強し。人若し慈善でう高き所より落つる時の殆ど再び回復すべからざるに至る。

慎しめよ汝孤兒院を設立して神と人とに事へんと欲するものよ、汝

の慈悲心已に世人の承認する所となり、汝の無私ある慈愛家として世に賞揚さる、時、是ぞ汝の無限地獄に墮落せんとする危急の場合たるを知れ、殊に此物質的の時世に於て事業の精神より持離さる、時此危險最も大なり、エリサベス夫人の彼女の聲名天下に轟き渡り國王彼女に謁を賜はらんとせしや恐懼遁れて跡を隠せしとかや、ハワードの遺言は只二ありしのみ、則ち彼の子息にして狂を病みしものも快復せんこと、彼の爲め石碑を建てざらんことありき、我に敵あるこそ幸なれ、我が名の知れざるこそ安全なれ、慈善家たるの名に對し誰か神聖ある敬慕を逞せざらんや、若し世に非常の功名を求むるものありて最も平易に公衆の尊敬を受けんと欲せば慈善事業に従事すべきあり、説教家として平々凡々なるものも、政治家として名なきものも、慈善家としては世の注意を惹き得べきなり、余の心に此危險を感じてより慈善事業に従事する人を傍より賞

め立つる事を止めたり、斯人若し巨人あれば賞讃さるゝを以て迷惑を感ずるのみ、小人あれば之れが爲めは誇り危難を彼の靈魂に導くあり、基督曰く

汝等人に見せん爲めに其義を人の前に行すことを慎め、もし然すば天は在す爾等の父より報賞を得じ、是故に施濟を行るとき人の榮を得ん爲めに會堂や街衢にて偽善者の如く篋を己が前は吹かしむる勿れ、我まことに爾等も告ん彼等の既にその報賞を得たり、なんぢ施濟をなすとき右の手の爲すことを左の手は知らずる勿れ、かくするは其施濟の隠れんが爲めなり、然らば隠れたるに鑒たまふ爾の父の明顯に報ひたまふべし。

(馬太傳六章一節より四節迄)

嗚呼之れ今日我國の慈善と稱するものなるか、慈善音樂會、慈善舞踏會、——慈善の百新聞の登録する所となり、百辯士の口頭に上る、

今や人類の善行の飢饉を感じつゝあるあり、一行は万言を以て天下に吹聴さる、恐るべき慈善家の名なり。

余の安心術として慈善事業の無益なるを悟れり、否亦無功なるのみならず余の一層余の欠點を摘示せられ、尙一層の懼怖を抱き、前日は勝りて心靈未來の危険を感ずるに至れり。

Where wouldst thou fly? To works—to empty forms

With thy dove wings?

Will these give shelter from eternal storms—

These poor dead things?

And "working" answers with a voice severe,

"Turn back, mistaken soul! Rest is not here!"

Henry Burton, in Sunday Magazine.

羽翼あらば何處に飛ばんわが魂よ、
事業へ乎、心よりせぬ事業へ乎。

永久のあらしのこゝに吹かぬかや、
事業にのゝ、死せるうはへの事業には。

怒るべき聲もて事業答へける、

こゝになし、まどへる魂よこゝを去れ。

ヘンリー・バートンの歌

脱罪術 其五 神學研究

平安を慈善事業に於て得る能はずして余の終極手段を取らざるを得ざるに至れり、余の事終に茲に至らんことを懼る、や久し、然

れども今の唯一途余の方向として存するのみ、即ち身を傳道界に投じて神の祝福を齎めんとするにありき。

凡そ世に嫌ふべきもの多しと雖も僧侶の如きものなし、余の基督教に入るや第一の煩慮として存せし事余も終にの牧師傳道師(基督教の僧侶)とならざるを得ざるに至らん乎にありき、余の神に祈れり如何なる卑しき職に就け玉ふも余を傳道師となし玉のざらん事を、余の勿論如何ある位置にあるとも福音を宣べ傳ふる事の怠らざるべし、

基督信徒たるもの一人として傳道の義務を避くるを得ず、然れども自ら傳道の職を取り、按手禮を受け、洗禮結婚の式を主り、Rev. (教師)の名稱を以て余の名を冠せらるゝに至るの余の考へても戦

慄する程なりき、よし余の車夫にまで下落するとも傳道師よのあらじ、神の榮光を顯はさんが爲には他途なきよあらず、——傳道師、傳道師、——嗚呼若し神余に命じて傳道師たれと言ひ、余の如何すべ

故に余の可成丈け傳道師仲間と交際を避けたり、而して若し人ありて余に傳道師たるべきを勸むるものあれば余の荒言を以て彼に答へ、此職に對する余の滿腔の嫌惡を吐露せり、彼等の聖書の語を引用して言へり、曰く「田の熟て穫時になれり收穫は多く工人の少し」、我國今日の急務として傳道に勝るものなし、我等信徒たるもの何事を捨て、も傳道師たるべきありと、余も傳道の急務あるを知れり、然れども彼等の所謂職業的の傳道に至ては余の少しも其急務たるを見る能はざりしのみならず、反て彼等の見解の狹隘なるを歎せり、殊に壯年の男子にして學未だ修まらず經驗未だ積まざるものが早く已に衆人の傳道師となり、妻を娶り子を擧げ老成人に類する生涯を送るを見て余の益々傳道師てう人士の卑しむべきを知れり。余の傳道師たるを厭ふに此に止まらざりしなり、余の觀る所によれり。

は是等人士の多くの外國傳道會社又の歐米宣教師に依て衣食するものにして彼等の風采も亦自ら非日本的なり、よし金銀の萬國の共有物なれば彼より之を受くるも不徳のあらざるべけれ共、我國固有の習慣と感情とを放棄して西洋人を真似んとするに至ては余の堪ゆる能はざる所なりき、その夫婦の關係たるや傍人をして夫の妻たるか妻の夫たるかを判別し能はざらしむ、その子の父をパパと呼び母をママと云ふ、其他余輩大和男子の目より以てすれば實は忍ぶべからざるの狀態を目撃せり、さなきだに基督教の外教なりとの故を以て我邦人の厭ふ所たるよ、今や基督教傳道師日常の有様の余輩をして基督教とは實に亞米利加教を云ふにはあらざるかの疑念を起さしむ、余の基督教の原理に服せしのみよして其今日歐米を行はる外形上の組織に感せしにあらざれば傳道師ていものを見るに多少攘夷的の觀念を以てし、時よ或の國賊視する事もなきにはあらざり

いなり。

然れども余の心中又理想的の傳道師を存せり、余は或る意味より言へば保羅もルーテルもリビンゲストーンも傳道師なりしを知れり、故に若し傳道師たれとの天命降るとも余は逃げ避くべき口實を有せざりしなり、然れども世間より見れば傳道師は傳道師なり、而して最多数の傳道師が余の非理想的の傳道師たれば余もその臭味を以て世に待遇せられ又終に之に感化さるゝの恐あり、神に對して避くるよ口實なく、余の全身全情之に反し、余の實に正反對の主義を有する二人の主に苦しめられたり。

余の思へらく余の平安を得ざるの余が傳道師たるの決心を爲し得ざればなりと、神の私慾の痕跡だも余の心中に存するを許し給はず、而して余の全く神を見る能はざるの余は尙傳道師たるまじとの慾心存すれば也、此最終の捧物を神に捧げ、此最大の刑罰(Penance)を余の

身に受くるに至らば神の必ず余に賜ふ平和の賜物を以てせらるべしと、「皮をもて皮に換るなれば人のその一切の所有物を以て己の生命に換ふべし」(約百二章四節)、われ我が靈魂を救はんが爲めに傳道師たるも辞せざるべし、たゞ我に給ふ平和を以てせよ、我の我の望と意志とに反し、此身の死せしものと思ひ、傳道師たるべければあり、余の此時の決心の實に世を捨て耶穌を來る罪人の決心なりと、

主よわれは いまぞゆく

十字架の血にて あらひたまへ

余の終に意を決し慈善病院を去て神學校に入れり

神學校

今の俗界を後に置き、世に屬する希望と功名心とを斷ち、余の魂を救はんが爲め、神の恵にあづからんが爲め、余の神學校の一室に閉籠り、祈禱と斷食とに依りて單に人生の最大幸福を得ん事を勉め

たり、勿論今日の神學校の中古時代の寺院にあらず、躰操場あり、浴場あり、文明世界の快樂にして害なきものの一つとしてその生徒の達し得べからざるものなし、故に余のサボナローラがボログナ府、ドミニカ派の寺院に於ける如き、又ハルテルがエヤフルトの「アウガスマン」寺院に於けるが如き辛苦の一つも受けしことなし、否余が慈善病院に於ける生涯と比較するときの安心快樂なるものなりき、實に神學校に入てより先づ第一に余の注意を惹きし事ハ其生徒の樂すぎる事なりき、實業學校に於ける一週三十四時間の授業時間の神學校に於ける二十時間以下となり、慈善病院に於ける一ヶ月間の夏休業の神學校に於ける五ヶ月間の夏期閉校となり、其他學費支給の點に於ても、又の業を終へて後職にあり就く點に於ても、余の神學生たるを以て非常の献身的の事と信する能はず、余にして若し最少の生存競争を以て一生を終るを目的となすならば余は神學生となり、後、傳道師とありて世を渡るも若くものなからん。

然れども身の安樂よあらずして余の夢からざる靈の快樂を神學校の壁内に得たり、毎朝の祈禱會、閑靜ある圖書館、名士大家の説教演説、老實ある教師の薫陶の實に余の思想を發達せしむるに於て大勢力を有せり、殊に希臘希伯來兩語の研究に余をして直接に聖書記者の思考に接せしめ、直に摩西に接するの感あらしめ、直に保羅に聴くの快あらしめたり、此感と此快との余の茲に至る迄に受し苦痛の大部分を償へり、余の思へり若し神學教育の區域をこれに止めなば其學生に及ぼす功力ハ現在の組織に百倍するからんと。然れども悲ひかな聖書研究のその一部分なりき、曰く聖書歴史、曰く教會歴史、曰く辯護學、曰く聖書神學、曰く實驗神學、曰く組織神學、曰く聖歌學、曰く聖音樂、曰く雄辯學、曰く説教學、曰く牧會學、——余の其他を記憶せず、——救靈術何又煩雜の甚だしきや。

嗚呼神聖なる神學校の空氣も余をして余の罪より解脱せしむる能はざりき、余は二重三重の瓦壁も悪魔の侵入を拒ぐ能はざるを知れり、朝夕の祈禱會、絶間なき讚美の聲も心中の魔力を減滅するに於ては無功なるを悟れり、習慣の物の功力を減ずるものあり、名薬も常に用ゆれば終は其功を失するなり、聖書祈禱音樂も之を日常の業務として従事研究するに至れば終に其神聖を失ひ、我の心も自らその感應を受けざるに至る、朝起きてより夜眠る迄、談ずる事の聖書なり、説教の批評あり、聖樂の優劣なり、時に神學上の議論起り、尊崇の念なくしては口にすべからざる聖き名さへ博物學者が木石を論ずる時の如く濫用さる、あり、時に聖樂の評論とありハイデマンデルゾーンをして至誠鬼神を泣かしめし極美の傑作も瓦礫の如くも破碎さる、あり、こゝに於てか余の心中未だ曾て經驗せしことなき一危険の醸しつゝ、あるを發見せり、即ち墮瀆の罪是なり。

「汝の神エホバの名を妄に口にあくべからず、エホバの名を妄りに口にあくる者を罰せで置かざるべし」との誠の余をして此危難より免がれしめんが爲めあり、聖名を瀆すの罪の教役者の罪よし。彼の大危険の實にこゝに存するなり。

是故に爾等に告ぐ人々の凡て犯す所の罪と神を瀆すことの赦されん然と人々の聖靈を瀆すことの赦さるべからず

(馬太傳十二〇三十一)

罪惡論の泰斗 シュニリヤス ムラル 此種の罪は就て論じて曰く

Unthinking recklessness, as such, is perilously secure from the sin against the Holy Ghost. Before a man can possibly commit this sin, evil must thoroughly have taken possession of him by a penetrating and spiritualizing process, whereby its principle is deliberately understood and adopted. But according to the conditions of man's earthly development, evil as the antithesis of good can attain this intensity where the inner life has previously been in very close contact with moral goodness. — Urwick's Transl. Vol. II p. 421.

藝演罪の罰に我等が罪の罪たるを感じ得べからざるに至るにあり、而してその極たるや如何ある聖語も祝福も我等の罪惡を癒すが爲めに功を奏せざるに至り、救済の望全く絶ゆるに及ぶ、恰も最良劑を用ゆるも癒へざる疾病の癒すに手術なきが如し、普通の攝生術として可成丈醫藥を用ひざるこそ必要あれ、然るも日常身も奇藥を取り之を習慣性と爲すに至れば病魔の侵すあるも之を拒ぐの術を得ざらしむ、余の之を思ひし時恐怖身に襲ひ來て何事もなす能はざるに至れり、余の身を最大危険の中へ投せり、余は救を得んが爲めに神學校へ入れり、而して永遠絶望の域へ墮落する門戸を神學校内に發見せり、——危険、危険。

歴史家チアンデル曰く神學の中心の心ありと、傳道の精神として技術にあらす、牧師の説教の俳優の演戯にあらす、精神的事業に入らんが爲めに技術的の鍛鍊を受くるの害の前者をして演戯的模倣的たらしむるにあり、自己の感せざる事を感じる様に言ひ、自己の確信せざる事を信する様も語らしむるの能辯術の弊害なり、是れ聖アウガスタンをして能辯學を目して虚言術と謂ひし所以なり、聞く獨逸國に於ては無神論者にして神學研究の後傳道師となるものありと、若し職業を目的として神學者たらんと欲する者あるも決して爲し得べからざるよあらず、哲學の一科として神學の特殊の玩味を有せり、古典學の參考として聖書の研究の有益なり、殊に人心を左右する術として傳道の野望人士の功名心を誘はざるにあらず、故も特殊の天啓に由らざる人も、天の召に與からざる人も、愛憐の情も動かされざる人も、同じく神學生となり得べく、傳道事業も従事し得べきあり、是れ神學研究の大誘惑なり、其弊や博愛捨己の泉源なる宗教をして自説擴張の一機關たらしめ、名簿上信徒の増加するを稱して傳教の成功と云ひ、社交上勢力を得るを以て教勢振張の兆とな

すに至る、曾て聞く某僧侶がその説教の感動より来る善男善女の喜捨金を賭して一夜の汚穢なる快樂を同寮僧侶に供したりと、是勿論極端の所業なりと雖も又以て宗教界危険の一斑を知るに足る、説教の製造すべきものよあらず、基督の言保羅の書の文法的な解剖すべきものにあらず、我保羅となりて始めて保羅を解し得べきなり、強て保羅の思想を組立てんとするもの粘土を以て生人間を模造せんとすると同一徹迂遠の業なり、詩人の生る(Poet is born)と、傳道師養成の造物主にあらずれば爲し能はざるなり。

さればよや世の大宗教家と稱するものにして反て神學校出身の人に多くあらざるを見る、神の人テジベ人モリヤのギレヤアの野人あり、而して此人その天職と精神とを他に授けんとするや十二耦の牛を御しつゝ、ありしシヤパテの子エリシヤを撰べり、ダニエルの官人なり、アモスのテユアの農夫なり、而して神が其子を降して世を救はんと

するや彼をしてヒレル、ガマリエルの門に學ばしめず反て彼をナザレの僻村に置き、レバノンの白頂キシモンの清流をして彼を教へしめたり、一乾物店の番頭たりしムーデー氏こそ實は十九世紀今日の宗教界最大勢力ならずや、神學校の天性の傳道師を發育するも之を造るものよあらず、神學校製造に係る傳道師こそ世の不用物にして危険物なり。

余の農學を以て余の職業となし得べし、余の史學を講じて余の衣食の途を立てんとするも余の良心の余を責めざるあり、然れども神學を以て余の業とあさんとするに至ては余の全く忍ぶ能はざる處なり、勿論勞力交換の主義より論する時の徳義上不都合なかるべけれども、その弊害と危険との之を爲さるに若かざらしむ、此害を認められたるこそ保羅の教役者の適宜の報酬を受くべき權利あるを承認せしと雖も自身の幕屋製作を以て業となせり、シエークル宗よ於ける教導

師たるものの俸給を受くべからずとの制の深き理由の其内に存するなり。

然り神學校も罪よりの逃れ場所にあらざるなり、若し個人的の悪魔の存在するありて人類を悩まさんと欲せばその善性の源なる神學校を濁すに若かず、而して教導師養生所たる神學校の悪魔攻撃の焼點たるの徴の一よして足らざるなり、學生中最も不品行なるものの神學生ありとの批評の余の勿論信せざる所あり、然れども彼等が清淨徳義を講ずる割合に思想の卑陋にして品性の高潔あらざる事は批難すべからざる事實と信するなり。

忘罪術 其一「ホーム」

若し神學校にして余を罪より隠さず、傳道師たるの決心よして余を罪より解脱すること能はざれば、平安を得るの場所と方法との余よ取りての盡きたりと謂つべきなり。

苦痛若し免かるゝに途なけれは之を忘るゝよしかず、而して忘罪術として常に余輩の注意よ登るものの幸福なる家族の建設にあり、人性の男女相合して始めて完全たるものなり、我の平安を得ざる其源因求むべからざるよあらず、我の自然性の補遺的の友を求めつゝ、あるなり、平穩の消積両局の電氣相合して後にあり、我の安からざるの我よ充たされざる自然性の存すればなり。

“Thou fair-haired youth: these tones so sad and stern,

Become not life's gay-spring.

But thou the black-eyed, sweet voiced maiden take,

Forget thy griefs, thy gloomy thoughts forsake;

Round her thy children and thy home shall bloom,

For all the world is love and virtue's home."

詩人ゲーテ言のすや、人生の其物自身にて完全なりと、即ち若の老に供するは希望を以てし、老の若に與ふるは成熟を以てす、男の女に於て美と柔とを認め、女の男に於て剛と勇とを求む、完全なる家族の完全なる人性あり、人の一家團樂和合の内にのみ其性の完全と理想とを達し得べし。

美しき詩人的の夢想なり、然れども考ふべくして得べからざるものこの「ホーム」なり、不満なき家族、悲歎なき家族、煩慮なき家族、嗚呼これ何處に實在するや、若し實在するとも如何にして余の之を得んや、金銀積て山をなすとも之を得る能はず、我獨り之を欲す

るも之を得る能はず、完全ある「ホーム」を作るの完全ある人を造るが如く難し、我先づ完全ならざれば我「ホーム」の完全なる理由の存するあるなし、身修而后家齊、「ホーム」の我の平安を求むる所よあらずして平安を與ふる處なり、「ホーム」の幸福の貯蓄所よしてその採掘所にあらず、求めんとして成れる「ホーム」の必ず壞れん、與へんとして成れる「ホーム」のみ幸福なる「ホーム」なり、「ホーム」、「ホーム」、幾多の青年男女がその幻象に欺ひかれ失望嶋岸に破船せしや、詩人「バイツル」の牧者の「愛」と相識て其岩石たるを知れりと、世に理想的の「ホーム」を作り得ずして失望するもの多き「ホーム」を以て客觀的の樂園と見做すもの多ければなり。

忘罪術

其二、利慾主義 Helonism.

平安を得るの術盡きて狂亂の極余が危険なる境遇に迫りしや、智者あり余に告げて曰く、汝何故に罪の爲めに苦慮するや、汝が以て罪とする處のもの汝の自然性にして汝之を脱せんと欲して脱すべからざるものなり、汝の慾心の爲めに汝の心を悩すと雖も、慾との汝の生命を保存する爲め此社會を組織せし慈仁なる自然が汝に與へし有益なる性なる事を知らざるか、慾との社會組織の土臺石なり、愛と云ひ仁と云ひ恵と云ひ義と云ひ皆慾てふ最大原動力の變幻あり、我の竊まざるの罪なるが故に竊まざるにあらずして、竊むの我に不利益なればあり、社會が殺人罪を罰するの罪なるが故に罰するにあらずして社會組織を維持せんが爲めに罰するなり、汝我を問て然らば自己と社會とを害なき時の竊むや」と云ふ勿れ、我竊て社會が我を罰せざればその社會の破壊すべし、而して我の生命を保持し我は快

樂を供する社會を破壊せしむるの我自身を破壊するなり、故に我の我自身(慾)の爲めに竊まざるなり、畢竟するは汝の稱して道德問題となすもの實に方便問題なり、善惡との利害てふ語の同義語なり、慾を脱せんとするの生命を終へんとするあり、汝慾心の爲めに悲むの愚なり、迷信なり、唯勉めて社會學の法則に従ひ汝の慾心を満たさしめよと。

實際的の哲理として輕んずべからざる議論なり、生存競争の理の生物發達の解明として最も満足あるものなり、此理を社會的現象の研究に適用してより社會學てふもの世に出たり、ニュートンの重力説の錯雜なる天体の運行を單純明瞭なる一紀律の中へ抱括せし如く、慾心説の社界萬般煩混なる事實を組織的科學の中に配列し得るに到れり、單純の眞理の一徴候なり、慾ある一語の下に政治も慈善も宗教も合同聯結するを得るの此哲理の眞理あるの證にあらずや。

而して之れ理論なるのみならず、又事實ならずや、人類の歴史の慾の歴史にあらすして何ぞや、戦争との慾の衝突あり、政治との慾の折合なり、マコーレーの所謂生活の境遇を安樂ならしむるの慾こそ人類進歩の最大原動力ならずや、四百年を出でずして而米大陸を開明人種の幸福ある住處と變せしもの慾なり、英國に最も強固なる憲法政治の起りしも慾の結果あり、野蠻の民の小兒と同じく慾なき民なり、慾の増進は開明の前兆にして慾なくして進歩のあるなし。如斯哲學今の白晝に識者の唱ふる處となれり、而して利慾哲學のポストロー(使徒)なる英のベンナム并にスペインの忠孝を以て世界に誇稱する我日本國民の非常に尊崇畏敬する人あり、「斯氏の言なり」との一言の九鼎の重きを有する證據あり、さらぬだに猜疑の念に富める我日本國民のことあれば、その尊崇する哲學者にして學理的に利慾の神聖?)と主位と教ゆるあれば、我等の滿腔の同意と贊成とを

以て彼の説に和し、彼の實行的の信者と化せんとするに至れり。然り若し我をしてスペインカー氏の聲名に嚇され、彼の博識に捲席せられて、眞面目に彼の假説を信じ、利慾主義を以て我の主義となし、之を我の行爲に應用せんか、我の之に依て我の苦痛より免かれざるなり、否か社界の之を組織するものより無私の從役を要求するものか、我若し自利を以て我の主義となさば社界の總掛りにて我を攻むるなり、スペインカー主義の罪惡の念と戦ふ我の良心に取て一時の鎮痛劑の用を爲すと雖も我が蒙るべき實際の苦痛を減せざるなり、無情殘忍なる世の中の尙ほ現然と我の前に屹立するありて其宥むべからざる法則と運命とを以て我に逼るあり、求むべき平和を有せざる人は斯氏の學說の嶄新奇抜なるが故に之れを玩味して思惟作用の鍊磨を試るも亦一興なりと雖も、饑渴義を慕ふの人より取りての彼の哲學の醫師が神經的患者に服用せしむる氣休藥たるに過ぎず、之よ

多少の香味と甘味なきにあらざると雖も我之を服して我の病軀の舊態を脱せず、内痛外疹共々我に存して我の病の愈むざるなり。抑も主樂主義あるもの之を嚴肅なる清黨的の教理を以て鍛鍊されたる英米國民の中に傳布さるゝも國民の其害を感ずる事至て小少なるべし、否、反て國民の思惟力を磨し迷信頑愚を排除するが爲に多少の功力あるからん、恰も強健なる身軀を有する人に取ては「アルコホル」飲料其他の刺激物は少しも害を感ぜざるのみならず時々の反て多少の利益するが如し、然れども固有の動物慾を支那或は印度の微弱なる道德律を以て僅に壓抑し來りし我國の如きは於て主樂主義を其儘輸入するに於ては其危険害毒の實に名狀すべからざるなり。余輩をして主樂主義を主張する學者の爲人を探らしむるに彼等の品性情性兩あがら彼等の哲學の如くならざるを知る、ダーウキン氏が南米の蠻人を教化せんが爲に時々金を傳道會社に寄附せしが如く、

ハクスレー氏が基督教の聖書を以て兒童德育の最大教科書ありと公言するが如く、インガソル氏が鰥寡孤獨を法廷に辯護するを以て無上の快樂とあすが如く、彼等は主樂説を説くも自ら之を實行せざるなり。

詩人シレル曾てド、ステール夫人を評して曰く「彼女の性質の彼女の哲學は越へて善良なり」と、哲學との一原理の中は宇宙の幻像を抱括するものにして、或は此原理を物質に求め、或は動力に、或は愛に、或は慾に求むるものなり、而して慾を以て宇宙を一括する亦哲學上の一機軸として見るに足るべきなり、然れども人の哲學の哲學として品性の品性あり、人のその思惟するが如し (as a man thinketh, so is he) (箴言第廿三章七節参考)との必しも事實ならず、哲學的の思惟の意志より獨立するものあれば理性を満足せんが爲めは意志の嗜好は従ふを得ず、余の慾心説を固守する人にしてその自他に對する觀念の

甚だ優にして甚だ愛すべき人を知れり、彼の心情の彼の理性に勝つて美あり、彼の心靈上の君子にして哲理上の蠻人あり、慾心説の哲學上の行爲として見るべきも事に行はるべきもの (Practical possibility) にあらず、善の善たる惡の惡たるの善惡の解折如何に依て變せざるあり、*“Rose is sweet by whatever name we call it.”* (薔薇の香バシき其名稱の如何に依らず)、勇氣なり献身なり愛國あり余の達すべき思想の如何なる學説より見るも異なる事なし、スペンサー氏が以て人類進歩の最終目的とあすものも亦利他主義 (Altruism) にあらずや、然れども慾の爲めの愛の愛にあらず、愛の己の利を求めず、慾心が進化して愛とならんとし死が進化して生とならんと云ふが如き、罪が進化して徳とあらんと云ふが如き、思惟し得べからざる背理なり、唯物的進化論てふ鍊金術の秘密の無限の時間にあり、此期限内に石も人となり得べし、非も是たるべし、慾も愛たるべしと、哲學と哲學と汝

の凡俗人種の洞察し得ざる蓋奥の裡に於て汝の「アロムピック」を以て罪より徳を造化せんとす、可驚、可驚、可驚!!!
 主樂説 (Hedonism) の粗暴なる強く余の自然性を變ずるの力を有せざりし、余の之を深く研究するの必要を感せざりしなり、唯物論者の材料中に基督信徒の稱する心靈上の經驗てふもの、存するあるなし、
 ジェームス、コッター、モリソンの英國不可思議論者中錚々たるものなり、然るに彼が歴史家ギボンに評するや左の語あり、
 ギボンの自身心靈上の志望を有せざりしが故に之を他人に認むる事能のざりしなり、靈界と其中真なる神とに依て起り來る感情の彼の解せざりし處なり、故に歴史編纂に際して此等事實に會するや彼の其原因結果を説明するに彼の了解し得る性情を以てせり、幽玄家の涉獵する神妙界の彼の窺ふべからざる所にして、彼のその版圖外に立ち、その奇異の報に接するや彼の之を

寫すは嘲弄滑稽的の文字を以てせり、
 哲學海に掉さいるもの、其奥義を知る由なしとあらば、心靈海
 は浮沈せざるもの、よして靈の苦樂を洞察し得るの理なし、余がメイ
 ン、スペンサーの有せざる心靈上の經驗を有せりと云ふの少しく自
 負し似たれども、これ余が是等學者の大和魂の何たるかを充分に解
 する能はずと云ふと少しも異なる事なし、余の心靈上の經驗の余の
 情性と境遇との然らしむる所にして余が彼等より勝りて徳を有するが
 故にあらず、物質的社界の觀察に於て、余のスペンサーを師として
 仰ぐと雖も、彼の哲學の余の心靈上の實驗に入るに場所なく、又之を解
 明するに足らざるなり。

忘罪術 其三

オプチニスム(樂天教)
 附 ニニテリヤン教并ニ新神學

主樂説不可思議説の基督教の正反對主義なり、前者の後者と相離る
 るの遠きや余の一躍して心靈の志望を棄却し拜すべきの神を有せず
 永遠の希望を興へざる所謂豚慾哲學(Pig Philosophy)を抱持するの膽力を
 有せざりしあり、エホバの恩恵ふかさを嘗ひしものにして純粹不可
 思議説を抱持するに至りしもの、余の未だ曾て聞かざるなり、唯物
 論に接して容易に宗教感念を去りし人の未だ宗教を感せざりし人な
 り、宗教の大事實なり、斯大事實を識認抱持せざる哲學の偏頗哲學
 なり。

然れども此處に唯物論の如く粗暴ならず、又基督教の如く嚴格なら
 ず、而かも宗教的希望と理想とを供し、物と云はず靈と云はず、
 萬有が神あるか神が万有なるか之を判別せざるのみならず判別せざ

るを以て却て高尚優美なりと自稱する學說(?)あり、此學派或ひの「オ
 フチミスム」と云ひ、或の「エモルソン主義」と云ひ、或の變遷して「新神
 學」と稱することあり、其罪惡問題を解明するや單純にして簡易あり、
 曰く善の浴くして惡の局部なり、否、惡なるもの善の變現にして
 惡てふもの、存する事なし、見よや腐骨も肥料として草樹に施せば
 百合花となり無花果となりて目と口とを歡ばすにあらずや、惡あれ
 ばこそ善あるあり、根の幹に於けるが如く、惡との善の本にして善
 ある限りの惡なかるべからず、故に惡を惡と思ふ勿れ然らば直ちよ
 惡より脱するを得ん、ノバリス曰く

人若し直ちに意を決して己の善(GOOD)なりと心を定むれば彼の實
 善たるを得るなり

と、罪惡との人の妄想にして罪惡を斷つ之に關する思惟を變ずれ
 ば足れり。

結論或の此に至らざるも惡を脱するの道として唯善のみに注意する
 の法あり、曰く善なれば然らば惡あらざるべし、曰く神の愛なれば汝
 の罪を責め玉ふの理なし、人靈の墮落未來の刑罰共、中古時代迷信
 家の妄想にして十九世紀の學術の已に之を排除せり、汝の稱する罪
 なるもの尙ほ進化の中途にある人類の不完全を云ふものあり、汝
 に未だ下等動物の情性存するあり、汝の之を脱するを得るに至るの
 尙ほ數千万年の後人類が進化の極度に達する時あり、汝が完全な
 らんと欲する慾望の蛙が空中に飛翔せんと欲するが如き、馬が後足
 のみよて歩まんとするが如き、馬鹿らしき希望あり、過つ人なり、
 薄弱なる之を女と云ふ、若し不完全なるを以て罪なりと云ひ、全能
 者を除くの外に罪なきもの、存する理なしと、樂天教と云ひ、ユニ
 テリヤン教と云ひ、又の一派の「新神學」と云ひ、其説く處稍や相異か
 る事なきにあらざれ共其類似する處の一なり、即ち罪てふ感念を

輕過するは非ざれば之を處置するに於て純粹基督教の如く嚴重ならざるあり。

惡の惡と思ひざれば惡ならざるべしとの想像の或る一種の信仰治療家が病を病と思ひざれば直ちに癒ゆべしと主張するが如し、然ども此種の治療の至難とする處の病を病と思ひざらしむるにあり、我の血熱四十度に達し、眼閉ぢ口腫れ手足痲痺する時何物か我の病まざるものありと信せしむる者あらんや、我の病むの事實なり、然るに我の病ますと信せんとす、我若し癒ゆるが爲めにかく信するあらば是僞信よして信仰あらざるあり、勿論世にの神経病ある者ありて其苦痛の原因の單に誤想に存するあり、此場合よ於ての思考を癒すの病を癒すなり、若し罪てふ觀念の單は病意の夢想よ止つて確實なる事實ならざれば之を意よ介せざれば之より免かる、を得るなれども、罪の事實の事實よして我若し之を思ひざれば我の之が爲めよ亡ばさ

る、あり、聞く駝鳥が獵師よ追跡せらる、やその終よ免る、能のざるを知れば其頭部を砂中に埋め以て全身を隠せしこと、自信し容易く捕獲さる、よ至ると、思想の中より罪なる觀念を脱して全身已よ罪より脱せりと考ふる人の實に此駝鳥の愚を學ぶものあり、世の稱して以て罪となすもの、中に罪ならざるものありとするも罪てふ觀念を生ずるに至らしめしに身に罪ありて后しからしめしにあらざるや、罪より脱して後始めて罪を思ひざるに至る、罪を思はずして罪より脱するにあらず。

善のみを慕へば自然と惡より脱すべしとの想像の幾分かの眞理を包含せざるにあらず、其子を呵嘖するを知て讚譽する事を知らざる父母の無智無情の父母なり、怠るあかれと責むるより學べば賞ありと勵ますにしかず、信徒の欠點を算へ上げてその信仰薄きを責め立つれば信徒の復活すべしと信する牧師の未だ心靈の組織を知らざる人

なり、律の殺し靈の活す、悪を避けしむるに善を知らしむるよし
かす。

然れども世にの姑息ある父母ありて幼児の發育を誤るもの尠しとせ
ず、ルーテル謂へるあり曰く、育児法の秘訣の一手に美果を持ち他
手に鞭を持つにありと、賞與のみを以て子を教んとする父母の其子
を愛せざる父母なり、ソロモン曰く「鞭をくへざる者はその子を憎
むあり、子を愛する者のしきりに之をいましむ」と、フキリツフ
ルックス謂へるあり曰く、三度神の慈悲を説いて一度神の嚴を説く
とを怠る勿れと、恩惠のみを説いて刑罰を説かざる牧師の眞實に教
會を愛せざる牧師なり、鞭と共ならざる美果、刑罰と合せざる慈悲
の賞譽にして賞譽ならず、恩惠にして恩惠ならず、暗を知らざる光り
貧を知らざる富、死を知らざる生の我その何物たるかを知る能はざ
るなり。

然らば善、善たらんが爲めは悪悪たるか、悪の存するかくして善の
存する能はざるか。

然り、然らず、善の善よして悪の悪なり、然れども善の善たるを知
覺せんが爲にの先づ悪と接せざるべからず、生命の樹のみを以て植
へ付けられたる園の人類を鍛錬進歩せしむるは足らず、善悪を知る
の樹の自由の意志を有する人類發達上の必要なり(創世記二章九節)哲
學者ライプニッツの「人類の墮落の人類を進歩せしめしよ於て最大の
効力を有せり」との言の蓋し此意を謂ひしからん。

或人云のん悪よして善を善たらしむるものなれば悪も亦善ならずや
と、汝愚かなるものよ、悪、悪たればこそ善をして善たらしむるか
り、悪若し善なれば善の善ならずして止みぬ、然り罪の罪たるを知
つて始めて惠の惠たるを知るあり、悪を避けずして善を慕ふ能はず、
悪の悪たるを知る是れ善なり、罪惡問題を正面より攻究せざる哲學

も神學も共々頼むに足らざるなり。

罪との不完全(Imperfection)を云ふよの非ざるなり、我が良心が我を責むるの我が神の如き智と力とを有せざるが故にあらず、聖書に謂ゆる天に在す爾曹の父の完全が如く爾曹も完全すべし(馬太傳五章四十八節)との神の絶対的の完全は達し得べしと謂ふよあらずして、神が神として完全が如く人も人として完全かるべしと謂ふなり、完全ある馬との人の如く物言ひ人の如く思惟する馬を云ふにあらずして馬の馬たる用を完全になすものを謂ふなり、故に人は罪ありと謂ふの人が人たるべきの完全を缺くと謂ふにあり、基督教が義人一人もあるなしと謂ふのこの事を謂ふなり、神が我を責むるの我が雨を降り得ず日を輝かし得ざるが故にあらずして我れ人を愛すべきよ人を憎むべなり、我怒るべからざるに怒ればなり、而して神の我が働くべき時に働かざるを責め玉ふのみならず我休むべきときよ休まざれば又

我を責め玉ふなり。

憤怒の我の有する情性の一なり、我此性を有するは我の人にして天使たらざるの證なり、然らば怒るの我に取りての罪ならざるか、人あり故なくして我の權利を犯す時我怒らざるを得んや、此憤怒の情我に起る我之を罪と云ひざるあり、然れども此情延ひて復讐の念となり害を以て害に報いんとするに至れば我の罪を犯せしあり、保羅曰く

怒りて罪を犯すこと勿れ怒て日の入まで至ること勿れ

(以弗所書第四章二十六節)

然り我の容易に我の不完全と罪とを判別し得るあり。不完全の罪ならざるのみならず不完全を認めざるの却て罪なり、人の完全は達するやその不完全なるを以て憂慮せざるに至る、達し得べからざる完全に達せんとして思慮を勞する人の未だ完全ならざ

る人なり。

罪との無學を謂にあらす、無學若し罪なれば何故に醫師の不養生を以て有名なるや、何故に代官人社會に國事犯の多きや、何故に牧師傳道師の嫉妬と悪口とを富むや、智識なき小兒こそ哲學者の談む善民の性を有するものにあらすや、野に耕し海に漁するものこそ都人の遠く及ばざる信義と誠實とを具るにあらすや、智育の普及にして罪を滅し得るならば何故に僅々四百万の人口を有するニューヨルク州に於て四千万の人口を有する日本國にまさる多數の殺人罪を生ずるや、世に有害なるものの中に教育を有する野蠻人の如きあらじ、聞く米國銅色土人の中も最も墮落するもの、白哲人種の智識を有して其道德と宗教とを有せざるものありと、希臘語を以てホーマーの著作を読み、拉典語を依てパルシルの牧羊歌を誦ひしものが、その蠻族に歸りし後の淫行放埒遙に山羊水牛と共に生長せし土人の及ばざる處なりと云ふ。

ダーウキン氏の世界週航記中南米テラデルフエゴの土人にして英國ロンドンに於て文明國の教育を受しものが故郷に歸りし後五年を出ずして他の蠻人と異なる事なきに至りしを載せり、道德の復活の文學の隆興と共に來らざるは十四世伊國の歴史を以て、ゲーテ、シエークスピアの言行録を以て徴すべきあり、人の意志を動かすもの乾燥冷淡なる學理をあらすして新鮮温暖なる感情なり、教場的の教訓にあらすして愛情的の感化なり、竊むべからずとの倫理學上の學理をあらすして竊盜罪の嫌惡すべきものたる事の宗教的の感念あり、若し倫理學的の教育よして德義を養成し得ると雖も之消極的の感化に止り、僅かよ自己を清くし害を他に加へざるに止り、博愛他に及ぼし、己を捨て他を救ふの積極的の德義を養ふを得ず、儒教の授くる德義スペンサー主義の德義の冷々淡々皆然らざるのなし、然

り罪の倫理的の智識欠乏にあらざるあり。
神の慈悲のみに意を留めて彼の刑罰を説かざる是ユニテリアン教ニ
ニバーサリスト教(宇宙神教)の特徴なり、

"There is wideness in God's mercy

Like the wideness of the sea"

神のなさけの はかりなや
海のひろさが ごとくあり

との宇宙神教主義の柱石あり、而して神を見る事閻魔王の如く唯刑
罰を人類に配布するを以て常任とするもの、如く思惟する人に向
ての宇宙神教の教義の多量の慰藉を興ふる事の疑ふべからざるなり、
然れども正義ならざる神の愛の愛にして愛ならざるなり、愛との慈
悲のみを云ふよあらず、われ罪を犯すとも我を罰せざる政府の我の
信任すべき政府よあらざるなり、赦すべき理由なくして罪人は赦免

を降せば主権者の威力全く行われざるに至る。

チャールス・ダーウソンの祖父エラスマス・ダーウソン常に語て曰
く「ユニテリアン教との落ち来る信徒を受け入る爲の柔毛を以て充た
したる蒲團なり」と、是ユ教の各點のみを摘示せし語なりと雖又能く
其一斑を觀破せし語あり、ユ教徒の稱するシヨナサン・エドワード
の野蠻教義(Savage Doctrines)なるもの勿論嫌ふべき處なきよあらず、
然れどもユ教の寛に過ぎるの甚だしき其教義を以て人靈深奥の希望
を満足し、甚だ嚴にして甚だ優ある基督的の君子を養成し能はざる
の普通觀察の徴する所ならむ。

是等の皆偽の預言なり、彼等は淺く民の女の傷を醫し平康からざる
時は平康平康といふものあり(耶利米亞第六章十四節)彼等の望を充た
さいる溪川あり、テマの隊客旅シバの旅客これを望みて耻愧を取り、

彼處に至りて面を赧はにかむ(約百記第六章十五節より二十節まで)我靈の
 希望きぼうの我が過去くわこの罪を赦ゆるされ、我が未來みらいを安全あんぜんならしめ、我の心よ
 全然ぜんぜんたる平和へいわを得にせしめ、我勉こつめずして神と人とを愛し得べく、善
 行ぎやうの自然ぜんぜんよ我より流れ出で、我働こきて疲つかれず、死しして死しせず、失望しつぱう
 せず、衰おとろへず、——即ち完全くわんぜんなる人となるにあり、博士ハクスレー氏
 曰いはく

"I protest that if some great Power would agree to make me always think what
 is true and do what is right 'on condition of being turned into a sort of clock
 and wound up every morning, I should instantly close with the offer."

若しある大力者たからしやありて余を變へんじて時計とけいの如きものとなし、毎朝まいちやう
 發條はつかいを巻まき置おけバ余をして勉こつめずして常に眞まことを思おもひ正ただを爲なすを
 得えせしむべしとあらバ余は直ただよ余の身を彼に委ゆぬべし
 と、而して余の解かいする所に依よれバ基督教は人を善ぜんの器うつはとなすものよ

して、先哲せんてつが以て詩人しじんの夢想むさうと認めし最大希望さいだいきぼうを我等に充みたすべし
 と宣言せんげんするものあり、われ基督教よ由て未だ此完全くわんぜんに達たする道を得
 ざればわれは未だ基督教を解かいせざるものなり、基督信徒きりすとの大慾たいよくを抱いだ
 かざる可べからず、印度宣教師いんどうせんきやうしウヰリヤム・ケリー曰いはく、Attempt great things
 for God, expect great things from God. (神かみの爲めよ大事を計畫けいかくし、神より大事
 を望のぞめ)と、我の人力じんりきの及およばざる大變動たいへんどうを我身に來きたと欲ほするもの
 なり。

求安錄 下の部

罪の原理

「リバイバル」にあらず、學問にあらず、慈善事業にあらず、傳道にあらず、又世の稱する忘罪術の一として功力を有するものなし、余の平安の得る能はざるものとして之を放棄せんか、我が心霊の空虚を充實すべきものの此宇宙間に存せざるか、怨あれば之に應ずる物あるは宇宙の恒則なるが如し、怨とは充實の預言ならずや、然るに我に世の充す能はざるの怨あり、人のみの満足し能はざる動物あるか、

“O Spirit, that dost prefer

Before all temples the upright heart and pure,

Instruct me, for thou know'st;

..... what in me is dark

Illumine; what is low, raise and support;
That to the height of this great argument
I may assert eternal Providence,

And justify the ways of God to men." — Milton.

噫聖靈よ、爾の諸々の宮殿に勝り

淨くして正しき心を受納し賜ふ、

真理の爾に存す、願くは我を教へよ、

……
私の暗きを輝し、私の低きを高め、

此問題の廣遠なるを憶せず、

我をして永久の攝理を講じ、

天道の是なることを辯せしめよ。

罪との何ぞや、私の怒る私の竊む是罪なるは相違なし、然れども何故に私の怒り私の竊むや、私の如何なれば我が願ふ所の善は之を行

はず反て願ひざる所の惡の之を行ふや、惡との苟合、汚穢、好色、巫術、仇恨、争鬪、妬忌、分怒、分争、結黨、異端、娼妓、兇殺、醉酒、放蕩(加拉太書五章十九、二十、二十一)を謂ふか、或の所謂肉の行あるものは心靈に存する病の徴候にして病其者に在らざるか、私の箇々に我が肉慾と戦ふの無益なるを知れり、然らば我が敵の本陣の何處にあるや、我よして其病根の存する所を知るを得ば我の之を除滅するを得ん。

若し惡其物の惡行にあらざるとならば善其物も善行よのあらざるべし、物を施す必しも善にあらざるあり、名廣めの爲めの慈善交際上の寄附金の慈善の如くにして慈善にあらざり、福音を世に傳ふる必しも善よあらざるあり、野望家の傳道師、佞奸人の宗教家はと憎むべきもの世に存せざるなり、善の精神にして行にあらざり、假令われ我がすべての所有を施し又焚る、爲めは我が身を予るとも若し愛なく

我は益なし保羅、我救われんが爲に何をなすべき乎の問題の決して簡易ある問題よあらざるあり。

愛國の善あり、然れども誰か愛國の美德を養成するよ於て最も成功ありしものなるや、國史の研究必しも愛國者を造らず、彼の狹隘にして宇内の形勢に達せざるが故に國家百年の計を誤まらしむるもの自國を以て中華と見做し五大洲の貢を皇國に奉らんが爲めに造られし如くに信する狂信家にあらずや、爵位恩給を以て繋ぐ愛國者の一旦緩急あれば義勇公に奉じ以て天壤無窮の皇運を扶翼するの徒にあらざるあり、愛國者の詩人の如く天生なり、國史に通せざるも愛國者の愛國者なり、官祿を受けざるも愛國者の國の爲め死するなり、國人に捨てらるるも愛國者の國を捨てざるなり、愛國の精神にして行にあらざれば之を外部より敲き込むこと能はざるなり、愛國の何たるの愛國者のみ知るなり、世間ありふれの愛國者、禮拜的の

愛國者、表誠的の愛國者の博士ジョンソンの所謂愛國者にして愛國てふもの、背後に隠る、奸人なり。

愛國者を造る難し、善人を造るの難なるものなり、巧利主義 (Utilitarianism) を以て養成したる善人の利益の爲めの善人にして實は頼むべからざる善人なり、純粹倫理學を以て養成したる善人の消極的の善人にして「ストイック派」の善人の如く自己を守るを知ると雖も他を利するに疎き善人あり、古人の善行を暗記して成りたる善人の自己の特性を發達せざる鸚鵡的の善人なり、而して眞正の善人との己の利を求めざる人(哥林多前書十三章五節)、己が事のみを顧みず人の事をも顧みる人(腓立比書二章四節)、天より賜ひし所の賜を忽略せざる人(提摩太前書四章十四節)なり、自己を害なはずして他を利し、己を潔くすると同時に公衆の幸福と社會の清淨とを計り、古人を學ぶと同時に自己の特性を開發する理想的の善人たらんとするの道の何

處にあるや。

或人きたりて基督に曰ける、善師よ、我かぎりなき生を得んが爲に何の善事を行べきかと馬太傳十九章十六節、即ち完全は達せんとならば如何なる善事を行すべきかとあり、而して基督の之に對する答辯の實に彼の教義の眞意を穿ちしものなりき、基督答て曰く、

Ti me erōtas peri lou agathou; eis estin ho agathos.

何故善事は就て我に問ふや善なるものの一のみ(即ち神なり)...

...自譯(馬太傳十九章十七節)

(註)此緊要なる一節の近來聖書學者の注意する處となり、余輩の自譯のギリースバツヒ、ラクマン、ナシエンドール氏等の撰定に係る希臘語の本文に依るものにして日本譯の「何故われを善と稱や一人の外に善者のなし即ち神なり」との自ら趣意を異にす(改正英譯) "Why askest thou me concerning that which is good? One there is who is good."

を参考せよ。

馬可傳十章十八節並に路加傳十八章十九節が同一の記事を載するに當て舊來の本文と同一の文字を用ゆるを見れば爰は引用せる改正本文の反つて誤謬ならんかと疑ふものもあらんかなれども、本文研究學の馬可路加兩傳の記事を以て寫字師の思惟より出し誤訂より成りしものとあせり、殊に十六節に於ける「善師よ Didaskale agathe よりラクマン、ナシエンドル、トレゲルス等の學者」[善] agathe なる形容詞を除きしを見れば改正本文の益々眞に近きを見るべし。
ユニテリアン教が基督の神ならずして人たるを證せんとするや常に此本文に憑れり、曰く基督の明言の彼自身を以て善なるものと稱せずして神のみを善者と教へ賜ひしを見れば基督の普通人間たりし明瞭なりと。

然れども余輩の見る處を以てすれば假令舊來の本文にして基督の語ありとするもユニテリアン教の註解は牽強附會の説と云ひざるを得ず、基督のこゝに自己の特性を辯明しつゝ、あるにあらざして只一般の眞理を説明しつゝ、あるなり、語勢を「われ」に置かずして「何故」に置いて見よ、然らば此本文の基督神性論に對する一の妨害たらざるを知るべし。

何を善と云ふとの問題に對して基督の「善と神なり」と答へ賜へり、孝も善なり、仁も善なり、然れども孝も仁も善の結果にして善其物の神なり、神を知るは善人となるなり、善を學ぶは神に近づくなり、善を求めずして神を知る能はず、神を知らずして善なる能はず、宗教と道德、行と信仰との同一物の両面よして一を去て他を知る能はざるなり、聖書の善人を以て神と共に歩むもの「創世記五章廿二節」となせり、神を離れて偶像よ仕ふるの善を去て惡を行ふあり、即ち惡

を行ふの眞正の偶像崇拜あり、基督教徒にわれ佛教徒よわれ義を重んじ正を求むるもの神の子供にして「イスラヘル」の世嗣なり。

若し善との神なりとせば惡とは勿論神を離るゝを云ふなり、竊じ、殺す姦淫するの神を離れし結果にして罪其物にあらざるなり、我れ人を殺す時に國法我を罰するの我の犯せし殺人罪其物の爲めにあらずして我が我の神を捨てしが故あり、神我と共にあり我神と共にある時の我罪を犯さんとするも犯し能はざるのみならず罪てふ念の我に存するあり、我の不完全なる、我の他人を惡口する、我の慾情の爲よ使役せらるゝ、我の傲慢なる、我の人を愛せざるの、皆悉く我が神を離れし故なり、故に我にして神に歸するを得ば我の善人となり得るなり、罪より免かるゝの法只此一途あるのみ。

斯く論究し來て余の始めて創世記よ載する人類墮落に關する記事の深遠なる意味を悟るを得たり、哲學者ライプニッツ曰く

創世記に記する人類の始祖墮落の記事の人類の歴史を攻究するに當て最も著しき最も信用すべき説なり

と、その口碑様譬喻的の記事の内は人情の深奥を穿ち人性の妙所を寫すに於ては余輩讀者をして愈々之を味て愈々之を賞嘆せしむ。

墮落以前の人の實は小兒ありし、彼等に智識なく衣服なく家屋なくその外形の狀に至つては今の南洋諸島の蠻人と多く異なる處なかりしならん、然れども今日の開明の人種と雖も全く墮落以前の人類に及ばざりし一點あり、即ちアダムエバの赤子の慈母に繼るが如く神は憑り頼みしなり、然れども今の人は哲學者も政治家も宗教家も多分は自己の智識に頼て歩み、若し神を知るものありと雖全く神は身を委ぬることなし。

狡猾ある蛇の誘との人類をして神より獨立せしめ神に頼らずして歩行せしめんとなり、「善惡を知るの樹」との實に分別の樹にして人その果を食し自ら是の善彼の惡と分別し得るに至らば神なくして獨り世を渡り得べしと考へたり、蛇婦は言けるに「汝等その樹の果實を食するも必ず死する事あらじ神汝等が之を食ふ日に汝等の目開け汝等の神の如くなりて善惡を知に至るを知りたまふあり」と、全然たる服従の人類の好まざる所、假令神命ありと雖ども少しも我意を張らずして世渡りする事の味なさよ、我も少しく神の如くにあり、我の欲する所を乞し、此完美なる世界を乞我の領地となさんものをと、是れ墮落を來たせし原意にして實に人類を不窮の艱苦に導き終に死に至らしめし原因なり。

婦樹を見れば食に善く目は美麗しく且智慧からんが爲に慕ひしき樹なるによりて遂に其菓實を取て食ひ亦之を己と偕なる夫に與へければ彼食へり、是に於て彼等の目俱に開て彼等其裸體なるを知り乃ち無花果樹の葉を綴て裳を作れり。

(創世記三章六、七節)

恰も小兒の生長するや長く嚴父の支配する所たるを惡み、獨り家産を自由にして恣に生涯を送らんものと思ひ、未だ經濟の道を知らざるよ、未だ世事に詳かならざるに、夙く已に父より離れて無限の艱苦を嘗め失敗も失敗を重ねしが如し。

人類が一度神より離れしや彼等に責任の念起り來れり、自ら衣を紡ぎ面に汗して地を耕やさるを得ざるに至れり、斯くして人類の歴史の全く新方向を取れり、彼の自ら學ばざるべからず、彼の自ら戦はざるべからず、彼の自ら責任を負はざるべからず、彼の勝ち劣り破る、人の諸ての家畜諸ての獸と同じく生存競争の場裡に入れり、人類六千年間の歴史、そのソフオクリスをして我等の涙囊を絞らしめし悲戯を草せしめしも、そのセルメンナスの「ドンキホテ」の豪遊談をして余輩を激笑せしむると同時は無言の憂恨を胸中に起さしむ

るも、そのグーテをして「Was sollen alle die Schmerz und Freuden」我に是等の悲と歡のあるの何の爲めなるぞやの悲聲を發せしめしものも、實に人類が活る水の源なる神を捨て壞れたる水溜なる己も憑り頼みしに依るにあらずして何ぞや(耶利米亞第二章十三節)

人類がその造主を離れてより彼の靈肉とも平衡を失ひ、靈の肉を支配し得ず、肉の靈も順ひ得ず、靈の許さざる事を肉の欲し、肉の及ばざる事を靈の望み、歴史家チアンプルの稱する人心内部の分離 (Internal Schism) 之より始まり、人彼自身が修羅の街と變じたり、此に於て肉の其自然性を守るを得ず、望むべからざることを望み、爲すべからざることを爲し、數多の疾病を惹起すに至れり、苦痛のあまり彼の藥品なるものを發明して病を癒さんとすと雖も、一局部に對する藥品の他の局部に對する毒品なれば、藥劑を施の僅かに強壯ある局部を害して病弱したる局部を助くるに過ぎず、よし又醫學の進歩

よ由て一病症に對する特治法の發見あれば人の未だ曾て知らざる病症の起るありて人類を悩ますあり、病種の増加の醫學の進歩に伴ひ今や衛生治療の方法の著しき進歩を爲せしに關せず人類の平均生活年限の僅かに一二年を加へしのみ、曾て革命以前の佛國の哲學者等が遠からずして醫術の進歩に依り人の生涯を永遠迄維持するに至るべしと妄想せしも、尙ほ人類全躰の病の魔鬼の生贄として一秒時間よ一人づ、死刑の罰を受けつゝあるなり、躰の病のその本心のくゝるひよある事を知らずして醫師に貢を絶たざる人の世に多きこそ實に歎すべきよあらずや。

自己を支配し得ざる人類がいかで隣人の權利と自由とを害せずして止むべけむや、神を失ひてより人各々心中に空虚を生じ、自ら此空虚を充たさんとして充たす能はず、依て他人をして之を充たさしめんとし、他人の富を貪はり、他人の妻を慕ひ、他人の名譽を猜み、

いかでかして心中無限の不平を満足せんと欲せり、然れども慾てふ餓鬼は養へば養ふ程猛烈を極め、得て益々貧しく、取て益々足らず、惡の惡を胚み、罪の罪を生み、全身亡びて后素めて他を害せざるに至る、此よ至て社會の法律てふものを設け之を組織するもの、行爲に制裁を加ふると雖も、一方に之を防げば他方に破れ、土堤を以て瀕流を堰くが如く、土堤益々高くして水層益々嵩み、年々歳々法律の敷を増加し、今や社會の平安を維持せんが爲め我國に於てすら六法四千六百二十九條を要するに至れり、而して法律を實行せんが爲めよの三万の警察官と年々五百萬の警察費を要し、八千人の裁判官と一千人の代言人の之が爲めに衣食し、十萬の陸軍二萬の海軍の我の權利を侵害せられざらんが爲めに設けらる、カーライル曰く「人生の最終問題の人その隣人の胸ぐらを掴み汝我を殺すか或は我汝を殺さんか」と言ふにありと、無限の神を以てのみ充たさるべき人靈が神

知らざるものを以て充たされんとするの能はざる事なり、モンエルの王チモールが歐亞兩大陸各半部を掠奪し、壯嚴を極めたる宮廷をサマルカンド府に開き、列國の王をして此處に朝せしむるに當て、一日歎聲を發して彼の侍臣に告げて曰く、「此世界の予の有するが如き欲望を充たす能はずと、時よ老鍊なる顧問官某進て曰く、「陛下よ神のみが人の靈を充たし得るあり」と、チモール此言を解するを得ず、尙も進で支那帝國をも彼の領土となさんと欲し遠征の途に就くや、ヤクサルテス河邊に於て砂漠の露と消へ失せたり、匹夫より起りし大閻秀吉が日本全國を己が有となし、尙も朝鮮三道を合し、威海外に加つて尙は其心情は憐むべきありて、「露とたち露と消ぬる我身なり難波のことの夢の世の中の悲聲を以て世を去りしを見れば、神を有せざる人の巨人にして小人あり、富貴にして赤貧あり、人類の頑愚なる六千年の歴史が世の以て頼むべからざるを教ると雖も尙

も兵備或の法律にのみ由て安心と満足とを得んと欲す、博士ムンケル曰く、此勞れ果てたる世の安からざるの神を求むる無聲の叫號なりと、人類の暗夜よ叫ぶ赤子の如く神よ神よと呼びつゝあるなり。平安を外に求めて得ず、富も名譽も無限の饑渴を充たすが爲め無効なるを知りたれば、人類の宗教なるものを考出し、石婦が人形を裝て母たるの情を無覺の木石に表すが如く、心靈の父を失ひてより偶像と稱する神の人形を造り、之を拜し之を崇め以て眞正の神に呈すべき自然性を外に洩さんとす、而るは耳ありて聽かず目ありて見へざる木石像の心靈を満足し得べきにあらざれば、或の苦業と稱して身を極寒極熱にさらし、以て皇天の嘉納にあづからんとし、或の坐禪と稱して自然の感覺を殺して平安の秘訣に達せんとす、又自ら此修業に堪はざるもの頻りに之に堪ゆるものを尊崇し、宇宙の神に達し得ずとも是等の聖者に繼り付て以て神の恩澤にあづからん

とす、此に於て教主政治あるもの起りて最も憎むべき最も厭ふべき
 壓制が世に行はるゝに至る、民の迷信は夥多の野望家を刺激し、政
 權を專にする能はざるものも、戰場に功を争ひ得ざるものも、宗教
 界てふ柔弱社會に於ては無量の權力を有するを得るに至る、而して
 教法師相互の嫉妬軋轢の宗派間の競争確執とあり、愛を説き慈悲を
 勸むる宗教家が互に相争ふの状の犬猿も畜ならざるあり、教會の天
 國に最も近くして最も遠き處あり、悪鬼已に聖殿を奪へり、人生の
 荒漠實に察すべきなり。
 如此にして人の人の敵となり、己の己の敵とあり、不平不満やるか
 たなく、此完備せる宇宙に生れながら人類程憐れむべき動物はなき
 に至れり。

詩人ゲーテのメフィスト(悪魔)が神に訴へし語に曰く
 月日と星の巧造よ
 我の批難すべきのあし

たゞはかきさの人の子が 己と己が身を攻むる
 よろづの物の頭のなる 人こそもとのすがたにて
 今も昔も變りなき 驚き入たる奇物なり
 天の光が彼の身に 宿りし事のなかりせば
 彼の命の今よりも 堪へ易かりしものならめ
 道理と稱へて道理をば 己を責むる器具とあし
 獸に劣る獸まで 下落するこそ隣れなれ
 神の許可にて我の謂ふ 人てふものハ夏の日に
 草叢に棲むばつた虫 長き後のすね足に
 飛んで跳たりはねてとび 古きあな言くりかへす
 心靜かに草叢の 中よ落付き居りかねて
 糞の塊ある毎に その鼻端を突入れる

或人云のん艱難と競争との實に人類進歩の大原動力なり、若し墮落が艱苦と競争とを來らせしからば墮落の進歩の始動力あらずやと。我之を知らず、然れども人類が流血と饑餓と無量の涙とを以て得し今日の開明進歩の彼が反逆に依て失ひし心靈の獨立と完全とを償ふに足るや、蒸氣、電信、シヤムペーン酒、クルツフ砲、水雷火船の平和、安心、愛憐、満足に勝りて善良なるものなるか、文明、文明、文明との歐洲の平和を保たむが爲に二百五十万人の常備兵と、之を維持せんが爲に毎年六十億万弗の支出を要し、虛無黨を製出し、癡癡患者を増加し、社會を益と錯雜ならしめ、人をして無限の怨と望の内に無限の愁苦を感せしむるものか。競争との實に進歩の原動力なるか、西諺に謂ゆる必要の發見の母ありとの言の必しも歴史上の事實なるか、萬物の靈たる人類の眼前の必要に逼るよあられの造化の微妙を探らざるか、他人と優劣を

決せんとするの野望心が人類進歩の最大原動力あるか、ミルトンの「失樂園」の貧に迫りての作あるか、ルーテルの宗教改革の天主教徒の揚言するが如くドミニカ派の僧侶に對する嫉妬心より出しか、コロムブスの米大陸發見の歐洲列國競争の結果なるか、競争の或る種の進歩の始動力なりしに相違なし、甲鐵艦の如き、アームストロング砲ノルデンフエルト銃の如き、無煙火薬の如き、或の燻製巻煙草の如き香竈葡萄酒の如き、皆現然たる競争の結果と云ひざるを得ず、然れども人類をして愈々高尚ならしめしもの、此地をして益々美麗からしめしもの、人を和合せしもの貧を減少せしもの、競争てふ利益心に刺戟されて此世に顯はれしものよあらざるなり、我は怡然たる餘裕ありて素めて大思想の我より出づるなり、俗世界の名譽を博せんと欲する野望にあらずして宇宙の大眞理を探らんと欲するの聖望がユベルニカスの天賦觀察となり終に彼の大法則を生めり、黃

金と象牙とを求めんとする葡萄牙國商人の冒險にあらずして黒人は天父の愛を示さんとするリビングストンの慈善心が闇黒大陸を開き、自由國の建設を促がせり、競争に依る進歩の一利あるも百害あり、一鐵道王が億万の富を積まんが爲に彼の四人の親友の自殺し數多の家産の倒れたり、一ナポレオンが帝冠を戴き佛國が暫時の榮光に誇らんが爲め、二百萬の生靈の戰場の露と消へ億萬の寡婦と孤子の饑餓と叫べり、競争的の進歩の人類一般の損害として利益にあらず、進歩の如く見えて退歩せり、眞正の進歩の愛憐の結果なり、歴史の然か云へり、我等の經驗も然か云へり。

嗚呼、然らば我をして我と和合せしめ、我が理想とする處我之を行し、我の惡む處我之を行さるゝに至らしむる道の何處にあるや、利慾に依らず、必要に逼まるに非ずして、霸然たる貴公子の餘裕を以て他を愛するの念慮より我の自己を忘るゝに至り、勝て誇らず、敗れて

絶望せず、働らきつゝ、休み、休みつゝ、働らき、生涯を樂みつゝ、之を神と國との爲に消費する我が理想的の人物と我をなさしむる道の此廣き宇宙間に存在せざるか、嗚呼、我の一生の苦痛の一生にして、彼のアラビヤ物語にある、世の中てふ絶壁の中間に命てふ一莖の根に縋がりつき、下よ死てふ大蛇が口を開きて我の落來るを待ち居れば、年月てふ鼠が細き危き命てふ莖の根元を噛みつゝ、あり、此危險ある境遇にたゞ妻子てふ草の茂るありて恐怖の中よ些少の甘味を呈すると云ふ有様の永遠の希望を有する我の享くべきものなるか、嗚呼、若し人心無聲の叫號を集合し得る細音器(Microphone)ありて吾人をして其聲を聞くを得せしめば悲哀の聲の天を裂き地を動かすもなほ足らざらん、嗚呼、我を救ふものあらざるか、嗚呼、メシヤの未だ降らざるか、宇宙の絶望の上に立てられしか、神の存せざるか、人の捨てられしか。

喜の音

失望暗夜に此聲あり、

なんぢらの神いひたまひ、あぐさめよ、汝等わが民をあぐさめよ、懇ろにエルサレムに語り之よば、り告よ、その服役の期すでに終り、その咎すでに赦されたり、そのもろくの罪によりてエホバの手よりうけしところの倍したりと。

(以賽亞四十章一二節)

婦その乳兒をわすれて己がはらの子をあひれまざることあらんや、縦ひかれら忘る、ことありとも我のあんちを忘る、ことあり、われ掌にあんちを彫刻めり、あんちの石垣のつねにわが前よあり。

(同四十九章十五、十六節)

我名を恐る、汝らにの義の日いで、昇らん、その翼よの醫す能をとなへん、汝等の半より出でし積の如く躍跳らん。

(馬拉基四章二節)

あまの使のつぐるを聞けよ、

“Christ ist erstanden!”

“Freude dem Sterblichen,

“Den die verderblichen,

“Schleichenden, erblichen

“Mängel umwandeln!”

キリストの睡みがへれり、

壞つべきものよよるこへ、

世々死よまとはれて

そのとりこたりしものよ。

嗚呼如何なる音ぞ、餘り善に過ぎて我の之を信する能はず。

Die Botschaft hör' ich wol, allein nur fehlt der Glaube.—Goethe's Faust, 765

(音信を我の聞く、然れども信仰我に乏し)

此教主との誰ぞ

"The Lord who all our foes o'ercame,

World, sin and death, and hell o'erthrow

And Jesus is the Conqueror's name"—

C. Wesley.

諸て我等の敵に勝ち、

陰府と世と死と罪とをば

さり従へしものにして

その名を耶穌と稱ふなり。

彼の如何なる生涯に依て此世と我を救ひしや、

われらが宣るところを信せしもの誰ぞや、エホバの手はたれ

よあらわれしや。

かれの主のまへに芽の如く、燥きたる土よりいづる樹株の如く

そだちたり、

われらが見るべきうるはしき容あり、うつくしき貌はなく、わ

れらがしたふべき艶色なし。

かれの侮られて人にすてられ、悲哀の人にして病患を知れり、

また面をおほひて避ることをせらる、者のごとく侮られたり、

われらも彼をたふとまざりき。

まことに彼のわれらの病患をかひ、我儕のかきしみを擔へり、

然るよわれら思へらく、彼のせめられ、神ようたれ苦しめらる

るありと。

彼のわれらの愆のために傷けられ、われらの不義のために碎かれ、みづから懲罰をうけてわれらに平安をあたらふ、そのうたれし瘡によりてわれらの癒されたり。

われらのみな羊のごとく迷ひておのゝ己が道にむかひゆけり、然るよエホバのわれら凡てのもの、不義をかれのうへに置たまへり。

彼へくるしめられるれどもみづから謙りて口をひらかず、屠場にひかる、羊羔のごとく、毛をさる者のまへもたす羊のごとくしてその口をひらかざりき。

かれの虐待と審判とによりて取去れたり、

その代の人のうち誰かかれが活るもの、地より絶れしことを思ひたりしや、

彼の我民のとの為ようたれしなり。

その墓のあしき者とともに設けられたれど、死るときに富めるものとともになれり、

かれの暴を行わず、その口への虚偽なかりき。

されどエホバのかれを砕くことをよるこびて之をあやましたまへり、

斯てかれの靈魂とがの献物をなすにいたらば、彼その末を見るを得、その日の末からん、

かつエホバの悦びたまふことのかれの手によりて樂ゆべし。

かれの己がたましひの煩勞をみて心たらはん、わが義しき僕の
その知識よりておほくの人を義とし、又かれらの不義をおは
ん。

このゆゑに我かれをして大なるものとともに物をわかち取らし
めん、

かれは強きものとともに掠物をわかちとるべし、

彼のかのが靈魂をかたぶけて死にいたらしめ、愆あるものと

もよ敷へられたればなり、

彼のおほくの人の罪をおひ、愆ある者の爲よどりなしをなせり。

(以賽亞五十三章)

我此救よ預からんと欲せば何をなすべきか

主イエスキリストを信せよ然らば爾および爾の家族も救はるべ

(使徒行傳十六章三十一節)

何故よ然るか、

それ神はその生たまへる獨子を賜ほどよ世の人を愛し給へり此
の凡て彼を信するものに亡ること無して永生を受けしめんが爲
なり。
(約翰傳三章十六節)

然り人の信仰に依てのみ義とせらるゝなり、儀式に依るにあらず、
血肉に依るにあらず、位によるよあらず、學識に依るにあらず、行
よ依るよあらず、只十字架の辱を受けしナザレの耶穌を信するに依
るのみ。

之れ迷信の如くに聞へて真理中の真理あり、人の經驗中の最も確實
なるものなり、我の此の福音を信するの聖書が斯く云ふが故にあら
ずして我の全性が之よ應答すればなり、我の經驗が之を證明すれば

なり、歴史が之を確むればなり、自然が之を教ゆればなり、——然り
信仰——信仰に依らずして人の救へるべき理由あるなし。

信仰の解

信仰といふ信すべからざることを信するよあらざるあり、二と二を合
すれば五なりといふ宇宙が消へ失するとも我の信する能のざるあり、
虚言を吐く善なりといふ水火の責に遇ふとも我の信する能のざるあ
り而して信すべからざるあり、人の虚喝手段を以て善道に導き得べ
しといふ如何なる證明ありと雖我の信せざるあり、信仰の信すべし事
を懼れず躊躇せずして信するを言ふなり。

信仰といふ了得し得ざる事を信せよと云ふにあらざるなり、舊約聖書
の五書の摩西の作あるや否やを信すると信せざるといふ教靈上一つの
關係を有せざるなり、以賽亞の預言書一人の作あるや二人の作な
るやの批評學上の問題として道徳上宗教上の問題よあらざるあり、
約翰傳の使徒約翰の作ならずと信するよ依て我は地極の刑罰を受く
べきとあらば我の甘じて之を受くべきあり、基督教の稱する信仰な
るもの、智能上の准許よあらずして心靈上の應諾あり、心靈の道徳
上の善惡を判別するものなれども事實上の眞偽を鑑定するものにあ
らず、故に我が靈を救ふの信仰の道徳的として智識的にあらず、勿
論人の信する如く思ふものなれば思惟の結果——殊に哲學上の思惟
ぬ——は信仰の如何を示すに足るべけれども、思惟——特に科學上
の思惟——の必しも信仰の反射像にあらざるなり、人の信仰如何を
察せんとなればその道徳上の行爲を見るべきなり。

人我に問ふて曰く信すべき事を信せざる人何處にあるやと、嗚呼無
 智の者よ汝の世の信すべき事を信せず信すべからざる事を信するに
 依て斯くの罪惡の世なる事を知らざる乎、姦淫する事盜む事虚妄の
 証據をたつることの惡しきことなるを知らざるものかきかれども
 之を信するもの幾干ぞある、眞理を知ると之を信するとの大差別
 あり、鹿の鹿あり馬の馬ありと知ると雖若し政權の陥ふべきあれバ
 鹿を見て馬と呼ぶよあらずや、二と二と合すれば四なりと知ると雖
 も自己を利せんが爲めに貳圓づゝの價値を有するもの二個を五圓
 なりと偽りて人よ賣るよあらずや、眞理の最後の戦勝者ありと唱
 ふるもの如何なる平凡の新聞記者も無節操の説教師も云ふと雖も
 幾人か之を信じ此信仰は依て實行するや、正義の神の存在を信すと
 揚言する基督信者にして眞に此大眞理を信じ身を立て道を行ふもの
 の幾干ぞある、宜なるかな基督の言や

人の子きたらんとし信を世に見んや (路加傳十八章八節)

ツラテスとの別人はあらず、彼の普通希臘人が人間普通の眞理と
 知りし事を信じて實行せしのみ、猶太國の預言者とは別に特種の秘
 密を包藏せしものにあらず、彼等の何れの猶太人も暗誦し居りし十
 誠を信じ自ら之を實行し又民に實行せしめんと勉めしのみ、ツシン
 トンありコロムウエルなりルーテルなりウエスレーなり彼等の偉大
 なりし最大理由の彼等が眞面目に普通道理を信せし故なり、若し我
 國人にして彼等が今日已に知る處の眞理を信するに至らば彼等の教
 化の已に九分通り實行せられしなり。
 宗教上の信仰なるものを以て信すべからざること信じ難きことを信
 する事と見做すもの未だ信仰の何たるを知らざる人あり、是れ信
 仰の眞正の意義なること、聖書の充分に證明する處にして亦言語學
 上の事實あり。

希伯來語の「ヘエミン」He'emini「信ずる」なる語は創世記十五章六節「アーマン」aman「支ゆる」の意味なり「オムナー」柱なる語を作る根詞より來るものにして「依り築く」又「依り頼む」の意あり、「オームン」omni「即ち誠實眞實」英語の verily なる語も亦同根詞より來る、新約書のアーマン amen「實に然かあれ」なる語も實に「アーマン」の變語にして「アーマン」の神以賽亞六十五章十六節の眞實の神と譯す、故にアブラハムが信じて「ヘエミン」以て義とせられしとの意の眞實の神は眞實を以て依り頼みしとの事なり、建築物が柱に凭る、如くアブラハムの神は倚掛りしなり、眞理の宇宙を支ゆる「オムナー」柱として之は依り頼むもの靈と眞とを以てせざるべからず（約翰傳四章二十四節）、舊約書が不孝の子を稱して「アーマン」眞實の存せざる子等眞實を有せざる子等と譯す、申命記三十二章二十節と云ふの能く不孝者の心を穿ちし言なり、希臘語のピスチヌーオー（Pisteno）「信ずる」なる動詞創世記十五章六節に

對し羅馬書四章三節を見よ并に「信」ピスチヌス（Pistis）なる名詞の前述の希伯來語の譯字として用ひらるゝものなり、共にパインソー（Painos）縛る「又」の結ぶなる語の變語にして廣大なる意義を有するに至れり、（英語の bind「繫ぐ」約束する」と對照せよ）而して新約聖書の記者はその各種の義に依て之を使用したれば原文の「ピスチヌーオー」并に「ピスチヌス」ある語を解するが爲めに吾人の重もに文の連續は依らざるべからず。此語の單純なる意味の信任あり、路加傳十六章十一節の「誰か眞の財を爾曹に託んや」の「任せんや」の意あり（約翰傳二章二十四節參考）、信任の任せらるゝもの、正直なるを要す、故に「ピスチヌス」亦眞率の意を含む、加拉太書五章二十二節に於て之を忠信と譯す、馬太傳二十三章二十三節の「義と仁」と信との眞實を云ふなり、或の確信の義なり即ち希伯來書十一章一節に於けるが如し、亦確證の意あり使徒行傳十、七章三十一節、その最も淺薄なる意味に於ては僅かゝ智識的の說服

を云ふは過ぎず即ち雅各書二章十九節に於けるが如し。
 英語の Believe 獨逸語の Glauben の共に カクソン語の Truhen (許す) なる語より來りしものにして Leave (捨てる) 任せる (live (生る) love (愛する) の三語) Believe (信する) と根原を共にす、(獨逸語の Glauben, liehen, leihen, liehen を對照せよ、信するの他に許すあり、即ち己を捨て他に任かすなり、而して我の我の愛する人に我を任かすなり、我を許し我を任かす人即ち我の愛するもの、我の生を繋ぐものなり、即ち愛の生命の精にして生命は實に愛なり)

支那語の信の我の國音之を「マユト」と訓す即ち誠實を云ふあり、(伊川程氏曰以實之謂信) 忠信と云ひ信任と云ひ信賴と云ひ一として眞實の意を含まざるのなし、希伯來語の「アメン」、希臘語の「ピスナス」、英語の「ベリイブ」、皆同一の意を含有す、言語の人類が未だその單純と眞率とを失ひざる前に發達せしものにしてその眞意を發表せしものなり、東西所を異よし風俗感情を異にせるに關せず「信なる詞の原

因の皆相似たり。
 故に信仰の基礎の眞實なり、眞實なくして信仰のあるなし、信仰の反對の詐偽なり、虚妄あり、無情なり、不親切あり、虚飾なり、空言あり、不忠なり、不孝なり、不義なり、權謀あり、術數あり、信仰なる語に反道理的の意を附せしに至りしの人情輕薄に進む及んで正直は頑愚視せられ學の以て媚俗何世の器具とありし時ありに
 信仰は實なり、故に信仰せらるるもの (Object of faith) も、信仰するもの (Subject of faith) も實あらざるべからず、實あらざるもの信すべからず、實ならざる人の信せざるなり、不實の人の信する人も物も世も存するなし、彼は友人親戚を悉く疑ふのみならず亦宇宙の大原則をも疑ふなり、自然の眞實なる慈母にして疑を懐ける子供い何をも

給せず。

我の三角形内の三角度を合すれば二直角なるを知る故に我の此幾何學上の原理を信じ、家屋の建築に於ても、橋梁の構造に於ても、此原理に依らんと欲す、我は正直の最良の政略なるを知る故に、我の身を處するに於ても、我の社會の義務を盡すに於ても、我の目前の不利益を顧みず、世の我を嘲けるを意とせず、我の此法に則らんとす、而して我の全性の此宇宙の偽物にあらざりて真正物なるを知れば、我の人生の最終目的の正義と慈悲と仁愛なるを知れば、時に依人權を擅し、明德輝を失ふに至ると雖、時の利慾の成巧し無私の失敗すると雖、我の我の目的を變幻極なき世の盛衰に依て定めず、萬古不易萬世不動の法則の上は築かんと欲す、即ち我の「有て在る者」(an that I am)、アームンたる者、忠信なる眞實の證者(黙示録三章十四節)、即ち宇宙の造主にして保維者なる靈なる神を信せんと欲す。

基督サマリヤの婦に告げて曰く、「神の靈あれば拜するものもまた靈と眞を以て之を拜すべき也」と、之を今日の語に換て言へば「神の精神なれば拜する者もまた精神と眞實とをもて之を拜すべき也」と讀むなり、神は宇宙の精神にして誠實あり(精神誠實共に「ペルソナ」の特性なることを記應せよ)、即ちカーライルの稱するEternal Verity(永遠の誠實)あり、黙示録記者のアームンたる者(The Amen)なり、而して我の信する處によれば我の救ひる、の我が誠實を以て誠實の神を信するに依るなり。

然らば我が慈善事業に従事し神と人との事へんとせし時我の誠實ならざりしか、我が傳道師とまでありても神意を充たさんとせし時我の神を信せざりしか。

然り汝の誠實なり、而して又神を信せざりしにあらざり、汝の信仰の全然ならざり、汝の信仰の汝を救ふに足る信仰にあらざりしな

り。
 誠實ある汝の神の宇宙の主宰にして無限の愛なるを知れ、此神に對する汝の位置の君に對する臣の位置にあらすして慈母に對する赤子の位置あるを記憶せよ、我等の神より萬を受て一を返上する能はず、我等の誠實其物さへも神の賜物なるを如何せん、我等の財も身も靈も神に捧げるとも神の只神のものを受けしのみ、神の與ふる者にして我の受くるものなり、神の恵むものにして我の恵まるものなり、神は愛するものにして我は愛せらるものなり、無限の愛は愛せんことを要して愛せらる、ことを要せず、神を愛せんと欲するもの、神に愛せられざるべからず。

然り我の神の義と正とを信せり、又幾分か神の愛を知れり、然ども我の神の全愛を知らざり、而して今之を知ると雖殆んど信する能はず、我の責任を以て委ねられたる神の僕なるを知り元金と利を附

して嚴格ある我の主人を満足せんと勉めたり(路加傳十五章、我は神の愛の我の善行を以て交換し得べきものと思惟せり、我の先づ我の行爲を以て我の義を以て神の友人となり然る後に彼と對等條約を結ばんと試みたり、我の自己の權限を知らざる高慢なるものなり、我は受造者にありながら造物者の眞似を爲したり、我の神の赤子なるに彼の兄弟の如き舉動をさせり、我が神の愛を充分に受けざるが故に神の我を困めしあり、嗚呼我の愚も亦甚しからずや、永遠の慈母(Eternal Mother)が恵まれよ愛せられよと我を責めつ、ありしのに我を恵めよ愛せよと叫びて我より神に迫りしとへ。

天ようたへ、地よろこべ、
 もろくの山よ聲をはちてうたへ、
 エホバのその民をなぐさめ、
 その苦しむものを憐みたまへばあり。

然どシオンノ云へリエホバ我をすて
主われをわすれたまへりと。

歸○その乳兒をわすれて己がはらの子をわはれまざるとあらんや。
縦ひかれら忘るゝことありとも我のなんぢを忘るゝことなし。

(以賽亞四十九章十三、十四、十五節)

此無限の愛に對して我の爲すべきことの我を全くその手に托す(Leave)
のみ、魚が水中に游泳する如く我等も神の愛の中へ浸るゝものな
り、我等の誤謬の心の戸を開いて充分に此愛を受納せざるにあり、
受けざりしが我等の罪なりしあり。

然れども汝の言ひんとす我の如き罪人如何で無限の愛を受べけんや
我先づ己を清くして而后神の愛を以て充さるべき也と、嗚呼誰か汝
を清くし得んや、汝の己を清めんとして清め能はざりし、汝を清め

得るものハ唯神のみ、汝の清まるを待て神に來らんとならバ永遠迄
待つも汝の神に來らざるべし、母の手より離れて泥中に陥りし小兒
の己を洗淨する迄の母の許に歸らざる乎、泥衣の儘泣て母に來るに
あらずや、而して母のその子が早く來らざりしを怒り直に新衣を取
て無智の小兒を裝ふにあらずや、永遠の慈母も亦然かせざらんや。
然れども我の此懷疑と疑察の世に生れ、我を任すべきの人としての曾
てありし事あり、偶々ありと信じて我を委すれば彼の我を利用して
我が爲めに計らず、我に缺乏するものハ他を信任するの性あり、何
んとなれば此罪惡世界に於ての信任の性を發達するの機會あれば
なり、神の無限の慈愛ならん、然れども其證何處にあるや、自然も
人も我を欺くに神のみハ我を欺かざるとの確證を我に與へよ、我は
此確信の起らんが爲めに我の非常の事實に接せざるべからず、僕
疑ハ我の習慣性あり、我信せんと欲して我の情性は我の信するを許

さす、「我儕は父を示せよ、然らば足れり、是れ人生の叫號の聲あり、人類の父を求めつゝあるなり、空天に懸る星、郊野に咲く百合花共に造主の愛を示さざるよのあらざれども、その颯風その地震その肉食獸その毒草は我が積年の疑心を破砕し、我をして安然として神に歸り、滿腔の信仰を以て我を彼に委するに至らしむるものにあらず、人類六千年の歴史の攝理の之を貫徹する事を示さざるよあらず、然れども世界幾千回の大戦争の如き、黒奴賣買事跡の如き、劣等人種虐待掠奪の如き、皆以て人々を敵として神の人類の塗炭に困しむを見て以て快樂となし給はざるやの感を起さしむ、我の我が罪の確かに赦されし證據を要す、我の眞の神の愛するものたるの證據を要す、我のこの是なるか非なるか判然せざる世の中も實に誠は是なるものにして正義の神が之を導き給ふとの確實なる證據を要す、然らざれば我信せんと欲して信する能はざるなり、然り若し宇宙に神の

存するありて人類に神を求むるの熱望ありとすれば、宇宙は此儘にて不完全なる宇宙あり、之れ悲哀の劇場なり、之れ一つの癡癡病院なり、西班牙の皇太子アルフォンソ一日「神が創めて宇宙を造り給ひし時、我若しその相談に預かるを得しあらば、我の少しく神に注意を呈して如斯世界を造らしめざりしものと、造化の悉く完備なるが如くあれども人のみの永久の難問あるが如し、宇宙の一點を欠ける完全物あるが如し。

樂園の回復 Paradise Regained.

博士マーカス・ドット曰く「基督が降らざりしものとして此世界を考究

する勿れ」と、然り基督ある實在の此失望世界の必要物なり、基督の此宇宙をして完全ならしめしもの也、基督に依てのみ人世は堪ゆべきものとされり、基督に依てのみ造化の失敗ならざりしを知るなり。なんぢら我をあふぎのぞめ然らばすくはれん。

(以賽亞四十五章廿二節)

モーセ野に蛇を擧げし如く人の子も擧げらるべし、凡て之を信する者に亡ること無して永生を受しめんが爲あり。

(約翰傳三章十四、十五節)

逆説の如く見へて真理中の真理たること人の自ら勉めて善人たる事能はざる事是なり、罪に依て孕まれ、罪の中に生長せし人が自己の甦甦にのみ依て罪より脱せんとするの、泉が水源より高く昇らんとするが如き、水夫が風に頼らずして意志の動作にのみ依て船を行らんとするが如き、望むべからざる事あり。エモルソンが處身の術

として青年に勸めて言へる Hith your wheel to the star (汝の車を星に繋げ) の語の基督の言へる「爾曹われを離る、時の何事をも行能す」の語と同意義を言ふものなり、我等の救の基督に於て神と繋がる、より來るものなり、而して如何なる理由の其内に存するよもせよ、福音的基督教會の確信として動かすべからざる事、即ち基督の生涯と死との救靈の必要にして基督に依らざれば人の神と一體たる事能はず又彼が神に對して犯せし罪の赦さる、ことなしとの事是なり。此信仰たる實に基督教會の基礎なり、

實に誠に此はか別な救ある事なし、蓋天下の人の中に我儕の依頼て救はるべき他の名を賜されば也。(使徒行傳四章十二節)

此大事實たる我等の推理に依て會得するよあらずして觀察と實驗とに依て確かに知認する處あり、藥品の効用の其病理學上の作用の知らる、前にもあるが如く基督の救靈力の其理を充分に解せざる前、

著明なり、罪の重荷は壓せらるゝもの、良心の譴責に困しむもの、
唯一の特効薬の基督の十字架あり。

摩西の律を身に纏ひ、嚴格清廉なるパリサイ宗の中、錚々の名を以て聞へ、時の猶太人として我も人も許して完全なる人ありと思ひし
マルツの保羅も、其の心中の苦より脱せんが爲めに、その心臓を三階の天上にまで引き登せ、無量の自由と擴張とを得むが爲め、彼の才能を見ること糞土の如くし、彼の脩鍊を迷愚妄信と見做し、麻衣して座を頭よ移ナザレの耶穌の十字架の前よ慚悔免を乞ふに至りて素めて心に安を得たり。

ニユミデヤの一青年が粗大の慾望を抱ひて羅馬より來り、彼の文才と雄辯との彼未だ三十歳に達せざるよ彼をして時の大家として名を伊太利の文學界に轟かしめたり、然れども彼の學と才との彼をして煩惱の支配より救ふ能はず、妾を換ると三度、非正の床に見を儲け

痴愚と知りながら尙ほ色慾の奴隷たるを好みしが、彼一朝聖書を讀ひて左の語に接せしや、基督教會の聖アウガスタンを得、情慾世界の一、大醉漢を失ひたり、

行を端して晝あゆむ如くすべし、饕餮醉酒また奸淫好色また争鬪、嫉妬よ歩むこと勿れ、惟なんなら主イエスキリストを衣よ、肉躰の慾を行のんが爲に其備をなすこと勿れ、

(羅馬書十三章十三、十四)

獨逸ツウリンギヤ森林中の一健兒、長ずるよ及びて聖靈創く其心を擾動し、不安の餘まり彼の父の命よ叛きて一寺院に入り、斷食祈禱の脩業を積み以て偏に天怒を宥めんとせり、然れども如何せん彼外を改むれば惡念内に湧出して止まず、外患内寇共に彼の小心を碎盡せんとする時、師父スマウピツツの一聲の不可謂の生命力を彼の心よ吹入れたる、義人の信仰に依て生く、神ハルイテルの罪を赦せり、

宇宙のその拾見を拾ひ上げたり、是ぞ他年ライン河邊に於て世界の王侯綺羅を纏ひ、歐土を迷信僕従の舊態に保存せむと議する時、羅馬の三層冠に對し信仰自由の嚆矢を放ちし偉男子あり。唯物論者の曰ふ、是れルーテルの迷信の爲さしめし所にして恰も野猪の危険を知らざるが如しと、道義學者の曰ふ、是れルーテルの好義心の然らしめし處なりと、然るもルーテル自身に如斯答へらく、

われ若し我の力を頼まば
つとむるとても益ぞなし、

神のゑらみにし人よして
我につきそひ給はずべ。

彼何人をたづぬるか、
イエスキリスト其人あり、

萬軍の主と叫び奉りて、

世々永久かはることなし。

英國ベッドフォード村に一錫工あり、彼の無學のその多問性の要求に應じて天地の大道を彼に説明する能はず、然るに彼の胸中に純白過敏なる心靈の宿るありて、彼れ一度神聖なる人生の貴重あるを認めしや、心を盡し精神を盡し心中の魔力を滅せんとせり、悔改の涙の流れて止む時なく、免を乞ふの號叫の聞くものをして彼を憫憐せしめたり、仰て天を睇れば太陽のその光線を彼が如き罪人の上に輝すことを惜むが如し、伏て地を臨めば草木の彼に衣食を供することを耻づるが如し、彼の良心を有せざる禽獸の境遇を羨みたり、聽かずや魔軍は彼が永遠の刑罰を受くるを見て暴笑するの聲を。然るに此重荷を負へる旅行者も基督の十字架の前に於ての知らずして脊上の荷擔の落るを感せり、彼後日此經驗を記して曰く、
嗚呼、基督、基督——余の眼中基督を除て他に一物なきに至れ

り、余の今の基督の血、埋葬、復活等の貴重なる事實を彼是と
 個々に余の心よ留めずして、耶穌を以て完全充分なる救主とし
 て見るよ至れり、余の已に受けし恩恵の恰も富貴の人が財布の
 内よ持ちあるく鑄錢小錢の如きものよして彼の金銀寶玉の家よ
 於て草苞の中に澤山貯へあるが如し、嗚呼、余の金銀も余の主余
 の救主なる基督に於て貯へあるなり、主の神の獨子と合躰の奧
 義よ余を導けり、余の彼よ連りて余の彼の肉の肉あり、若し彼
 と余との一躰なりとならば彼の義、彼の功、彼の勝利皆余のも
 のなり、余の今の同時よ天と地とに棲息するものあるを知れり、
 即ち余の余の基督よ於て天に在るものにして余の肉躰を以て地
 に留まれり、……我等の基督に依て義を完せり、彼に依て死し、
 彼に依て死より甦り、彼に依て罪と死と惡魔と陰府とに打勝て
 り、余の叫べり、「主を讚美せよ彼の聖殿よ於て神を讚美せよと

是ぞ天路歷程の著者として最も純粹なる英語を世界の文學史上に遺
 し、スチユアト家末世の時代よ當て英國國民に單純有力ある福音を與
 へしシモン・ハバニヤンあり。

われ更よ何を言はんや、銃を肩にし、夕陽よ向て家に歸る途中、「神
 の其獨子を世に降し賜ふ程世を愛し賜へり」との天聲に感殺せられ、
 銃を地よ擲て感謝の涙と共に身を天命に委ねしヒナヤル氏。暴風
 雨を犯し、シエクル派の禮拜堂よ臨み、「青年よ自己を見ずして十字
 架を見よ」と教師にアテニスリ説教をせられて行性品性共に大變動を
 來せしスボルシモン氏。多年完全なる道德を實行して神と人との前
 に己を義とせんと勉めしも終よ能はずして

Just as I am without one plea,
 But that thy blood was shed for me,.....

われをわたのまじ 十字架にのぼりし

耶穌よびたまへ

我キリストにゆく

の歌を以て始めて歡喜を以て神を讚美せしエリオット婦人、——嗚呼、余の余の筆の鈍さを歎す、基督の十字架てふ歴史上の大奇跡、其哲理の何であれ、其事實を疑ふものゝ電光暗夜を輝す時電氣の存在を疑て可なり、怒濤船を覆す時颶風の吹かすとい信じて可ならむ。

罪人の長ある余も終ふ此歴史上の大事實を忽がせにする能はざるに至れり、洗禮を受けて後十數年、種々の馬鹿らしき經驗と失敗の後、天賦の精力と腦力とを物もあらぬものゝ爲めに消費せし後、余の余の罪の有の儘にて、父の慈悲のみを頼にて父の家に歸り來り、理屈を述べず義を立てず、唯余の神が余の爲めよ世の始めより備へし、神の小羊の贖に憑らざるを得ざるに至れり。嗚呼神よ余の信せざるを得ざれば信するあり、耶穌基督の十字架の爲めに余の赦すべからざる罪を赦せよ、余の今爾に捧ぐるよ一の善行のあるまし、余

ハ今余を義とする爲めよ一の善性の誇るべきなし、余の捧物の此疲れ果たる身と精神なり、此碎けたる心なり、

あ、神よねがのくんのあんぢの仁慈によりて我をわはれみ、

なんぢの憐憫のおほさによりてわがもろくの愆をけしたまへ。

わが不義をことごとくあらひさり、

我をわが罪よりきよめたまへ。

われわれが愆を知る、

わが罪の常にわが前にあり。

我のなんぢにむかひて獨なんぢに罪ををかし、聖前よあしきことを行へり。

されば汝ものいふとき義とせられ、

あんぢ鞠くとき咎めなしとせられ給ふ。

視よわれ邪曲のなかに生まれ、

罪にありてわが母われをばらみたりき。

かんぢ眞實を心の衷にまでのだみ、

わが隠れたるところよ智慧をしらしめ給へん。

なんぢヒツプをもて我れをきよめたまへ、

さらばわれ淨まらん、

我をあらひ給へ、

さればわれ雪よりも白からん。

なんぢわれによるこびと快樂とをさかせ、

なんぢ碎きし骨をよるこびせたまへ。

ねがひくハ聖顔をわがすべての罪よりそむけ、

わがすべての不義をけしたまへ。

あゝ神よわがために清き心をつくり、

わが衷になはさ靈をあらたにをこしたまへ。

われを聖前より棄てたまふなかれ、

汝の清き靈をわれより取りたまふなかれ。

なんぢの救のよるこびを我にかへし、

自由の靈をあたへて我をたもちたまへ。

さればわれ愆ををさせる者になんぢの途ををしへん、

罪人のかんぢに歸りきたるべし。

.....

なんぢの祭物をこのみたまへす、

もし然らずハ我これをさ、げん、

なんぢまた燔祭をも悦びたまへす、

神のもとめたまふ祭物ハくだけたる靈魂なり、

神よなんぢの碎けたる悔しこ、ろを競めたまふまじ。

.....

(詩篇第五十一篇)

時よ聲あり余の全身よ染渡りて曰く、汝の捧物の受納せられたり、汝舊衣を脱して我が汝の爲めよ備へし義の衣を着よと、われ答て曰く、爾の僕此處よあり爾の聖意よ依りてわれを恵めよと、時よ余の徳流の基督より我身に注入するを感せり(馬可傳五章三節)、而して歡喜平和感謝の情の交り來て余の心を満たし、余をして席に堪へざらしめたり、余の直に林中里離れたる所に至り、鶉枝に巢を結び、羊鳴遠く聞へて聲微かなる處、獨り清流の邊よ跪き、感謝の祈禱を捧げたりき、余の祈禱今の一の願事の存するを、たゞ基督ある言盡されぬ神の賜物に就て神に感謝するのみなりき。

余の此時の安心の我國維新の際國司諸侯が邦土を天皇陛下よ返上せし時の感なりしと考ふるなり、彼に支配すべき領土のあるあれば彼に養ふべきの臣下あり、朝廷に納むべきの貢あり、彼の収入の何十

萬石の多額ありしと雖も、彼の勢權の彼の國內に普かりしと雖も、彼が己の領土を外敵より保護するの心配、彼の臣下よ平和と家祿とを與ふるの責任の、彼をして榮譽と權力との内に憂愁日月を送らしめたり、然るに邦土奉還となりて聖明天子の彼の領地を受納し給ふと同時に之に附着する責任を悉く引受け給ひければ、國司の今の純然たる朝廷の臣下となり、只命を朝廷に待ち、以てその恩に沐浴するに至れり、而して慈惠よ富む我天皇陛下の特別の御恩召を以て元高十分の一を彼に賜り、加ふるに高位勳爵の恩典を以て待遇せらる、邦土奉還の我國正統なる皇室の威權を増し、諸侯を無益の責任と苦勞とより脱せしめ、天下一統に歸して庶民太平を賜ふに至らしめたり。

余も余の身と靈とを神に捧げざりし時の自身てふ小天地を支配する一小君主なりき、此小國其丈け五尺よ充たされ共種々の義務と責任

との附着するありて能く之を治め能く其本分を盡さんが爲めよの余の全心全力を盡したり、其隣人に對する外交の實に混雜を極めたるものにして、一を利せんとするれば他を害するあり、賭ての人よ満足を與んとすれば誰も満足せざるあり、全く消極的の政略を取らんとすれば天道てふ大法令のあるありて余の冷淡と怯弱とを責むるあり、退て身を隠す能はず、進んで義務を果す能はず、實よ此世を憂世との能くも言ひしものなりと思へり、而して其對隣策の未だ局を結ばざるに、宇宙の中央權を握る天帝の來て頻りよ余より貢を促すあり、命あり曰く我の汝よ銀五千を預け置けり、我にその利を拂へと、而して若し余にして之よ應せざれば余の無益なる僕として外の幽暗に逐やられ其處にて哀哭切齒せざるべからず(馬太傳二十五章)余の王命に順ふの利と快とを知ると雖も、如何せん國事多端なると王命の嚴よして犯すべからざるとより余の貢の年々未納の高を増加し、戦々

競々として薄氷を踐の思をおし、此不愉快なる生涯を以て避くべからざる運命と見做し、不快憂鬱の中に貴重なる時間を消費したりき。然ども余の全身を神に奉還せよとの命あるや、余の以爲らく、余にして今悉く余の持物と身と靈とを神よ還さんか、神の余をして乏からしむるも知れず、掌にある一羽の雀の枝上にある二羽に勝る、物の可成丈手ばさぬが宜し、余の余の収入の十分の一を捧ぐべし、余の忠誠を以て神に主として臣事すべし、余の余の行爲に大改革を實行し神の僕たるに耻ざる舉動をなすべし、然れども余の全身を神に上げ渡すに至ての余の容易に肯する能はず、而して亦道義學者「新神學者」の輩も傍より余に贊して曰く汝憶病者よ、汝の汝の義務を果す能はざるか、神が汝よ道德上の律を與へし汝が之を實行するの力を有すればあり、西郷隆盛言はずや、

聖賢よあらんと欲する志想古人の事蹟を見て逆ても及ばぬと云

ふ穢なる心の戦に臨んで逃ぐるより卑怯

と、基督教の贖罪論なるものの人を怠惰怯弱ならしむるものにして博學勇敢の士の以て意介すべきものよあらず、汝基督を模範として學べよ、精神一發何事不成、汝の意志を硬固にし、万障を排除し、完全なる生涯の見本を世に示せよ」と。

是を思ひ彼を思ひて余の尙は數年間神より獨立を維持せり、余の尙は余の領土を保ち應分の貢を納めて余の君主たるの權力を保存せり、然れども窮迫の終に余をして邦土奉還の策を講せざるを得ざるに至らしめたり、余の自負心は逆ひ、道義學者の嘲弄を省みず、余の余一人の決心を以て余の身も靈も慾も望も愛も意志も悉く神に引渡せり、而して見よ余の始めて富めるものとされり、生命の得んと欲して失ひ失て而して得らる、余の余を捨て余を得たり、全身奉還の結果は舊祿十分の一の下賜にあらずして神と宇宙と永遠とのその報として余に賜はれたる。

奉還後の余の生涯の實は愉快安心なるものなり、余の義務の管に神命を待つにあり、諸ての善き物は今の余の勞動の報酬として余の受くるものにあらずして、余の信仰に對する神の賞與として余に賜はるものされば、余の莫大なる請求を神より爲し得べく、又神の余の勞働は百倍する賜物を余に下し給ふなり、衣食を得るの心配今は全く余の心より絶へたり、「己の子を惜ずして我儕衆の爲に之を付せる者の豈かれに併て萬物を我儕に賜はざらん乎(羅馬書八章三十二節) エホバのわが牧者なり、我乏しきことあらじ、エホバ我をみどりの野にふさせ、いこひの水濱にともなひたまふ、エホバのわが靈魂をいかし、名のゆるを以て我をたゞしき路のみらびき給ふ、たとひわれ死のかげの谷をあゆむとも禍害をおそれじ、なんぢ我とともに在せばなり、なんぢの答なんぢの杖われを慰む、

なんぢわが仇のまへに我がために筵をまうけ、わが首にあぶら
をそ、ぎたまふ、わが酒杯のあふるゝなり、わが世にあらん限
りのかならず恩恵と憐憫とわれよをひきたらん、我のとしへ
にエホヤの宮にすまん。(詩篇第二十三篇)

余の今の義務として善を爲さるに至れり、傳道にまれ慈善にまれ
余の余の快樂として是は従事し得るに至れり、シモン・ハワードの
監獄改良事業を以て彼の道樂(Hobby)なりと云へり、基督信徒の事業は
實は彼等の遊戯なり、リビンゲストンの紀行を讀む者の誰か彼の語
調に笑談戯言の多きに驚かざる、將は獅子は啣殺されんとし僅かに
彼の従僕の援助に依て救われし時、彼の笑て獨言して曰く、「我等の
天職を終るまでの不滅なるが如し」(We seem immortal till our work is done.)千
八百七十二年七月十日彼の二年間の探検を終て海濱に達するや、彼
の手帳に左の如く記せり、

特別なる目的なくして祈禱斷食するの無益に時を消費するなり、
之一種の贅澤と見做して可なり、他人に一の利益を與へざれば
あり、之病中苦痛の爲は叫號するが如きものなり、——實に或
人の病める時の絶間なく呻ことを以て樂とあすが如し、——余の
考ふるに斷食日(Fast)四十日間の毎年亞非利加内地の蠻族を見舞
ふ爲めに消費することを最も利益あることならん、是實に避くべ
からざる饑渴を感謝しつつ、忍ぶの道なり、達すべき目的の遠大
あるを知らば人の砂糖も茶も咖啡もなくして忍び得るものなり、
余の千八百六十六年九月より六十八年十二月までは是等の食用品
何れも味ひし事なかりき。」

是を獅子の哮るも、大蛇の蟠かまるとも、熱病の犯すあるも、土人に
攻撃さるゝも、蠅に惱まざるゝも、少しも意を介する事なく、歡喜
と讚美とを以て三十年間一日の如く、閻黒大陸を縦横截斷し、終る意

神よ余の再び余の全身を悉して爾に捧げまつる。願くは余をして亞非利加大陸なる人類の此大患を癒すが爲め一人前の職を盡さしめよの語を以て赤道直下パングウエロー湖邊に於て永眠の枕に就きし偉人リヒングストーンなり。

義務よ、義務よと叫ぶもの。能く義務を果す人はあらざるなり、義務の念の荷擔とあり、心志を壓してその活動力を減殺するものなり、如何に面白き學科も學校の課目とありて強ひらる、時のその甘味返て苦味と變ずるが如く如何に高尚なる事業も義務として之に當る時の乾燥無味の奴隸的事業と變ずるなり、基督信者の大事業家たり得るの大原因は彼の己は事業を遂げしものなればなり、神の前に己を義とし人の前に名譽を博するの必要なければなり、恰も億萬の富を有して金錢を得るの必要なきもの。常に商業界に於て勝利を得るものあるが如し、名将の己勝の戦に非ざれば戦はずとかや、故に彼が

戰場に臨むや快活自由、樂戦して敵を追窮す。聞く大石内藏之助が吉良上野介の邸を襲ふや、彼れ先づ竊は勇士二人を遣し、兼て内應として吉良邸に遣し置し婦人某と計り、上野介が廁に至るの際、彼の白頭を切斷したりと、而して目的物己に掌中に入り、積年の憤念已は霽れてより、義士の心中に一の懸念の存するなく、今の死するも何かせん、思ひ晴れつ身の捨つる、浮世の月よかゝる雲を、いざ一戦して慰まさん、兼て磨きしこの劍、岩をも透す桑の弓、受けて知れかし、武士の膽、身を惜まぬの君が爲め、思を積る白雪を、散すは今朝の峯の春風、嗚呼誰か此思煩のなき義士の鋒前に抗するものあらむや。

基督曰く「懼るゝ勿れ我すでに世に勝り」と (Ireneka have conquered, 已成勳詞なり)、道義學者並にユニテリアンの何と云ふとも福音的基督信者の安心勇氣の大泉源の實は基督に於ける已成の勝利に存するなり、我

の爲すべき事の基督已に我が爲めに爲し遂げたり、我の義の基督に於て已よ天よあり、我の已に彼れの血を以て買はれたり、我の得べきものの我已よ之を得たり、いざ殘餘の生涯の報恩の戦して樂まんなり、彼が老て益々壯なるの解明なり。無冠王コロムウエルが未だイリーの農夫たりし頃彼の従妹セントジョーン夫人に送りし書簡として保存せられたるもの、中に左の語あり、

前畧：……余の靈の長者どもの教會にあり、余の身の希望の平安に居る、而して若し此世に於て余の神の爲めは働らさ又の忍ぶを得、以て彼の榮光を顯すを得ば、余の幸之より大なるのなし、實は神の味方となりて身を捧ぐべき人の中に、この卑しき余の如きものはあらじ、余の已に前以て多分の給料を受けたり、……嗚呼神の恵の大あるかな、願ふ余の爲めに

神を讚美せよ、願ふ余の心の中よ善工を始めし者これをキリストの日に完ふせられんことを余の爲めに祈れよ云々、
カーライル此書簡を評して曰く、

嗚呼近世の讀者よ、此書簡解し難く見ゆるなれども余の汝が其意を解せんがために勉めん事を汝に勸む、万金の價値ある人魂存在の確證其内にあり、……是實は英雄の起り得べき時代からざりしや、實に英雄たるの難からざりしかり
と、英國を改造し歐洲を洗淨せし彼の功績も彼の救主が彼を罪より救はんが爲め十字架上に流せし寶血の報恩として見る時、彼も取りての糞土の價値もあらざりしなり、「主よ、假令余の凄慘卑賤なる罪人なりと雖も恩恵に依て爾と契約の裡にあり」との彼の最終の祈禱なりき、佛のラマーチン英のフンデリックハリソンの輩がコロムウエルを解し得ざるの理由の單に彼等が無冠王の宗教を解せざるに依

るなり。
 基督の救に與かりてより義務を盡すの快樂と變ずると同時に罪を犯すの苦痛と變ずるあり、善を愛し惡を惡むの念の始めて此時に起るなり、即ち善惡に對する余の好憎の轉倒せしあり、善を爲すの荷擔ならず、惡を避くるに努力を要せず、昔時の虐王が自由氣儘に自己の意向に従ひて事を爲せしが如く、基督の救は預かりしもの己の意の儘に何事をも爲し得るなり、善人を縛るの法律あるなし、惡我の忌嫌ふ處となり、善我の戀慕ふ處とかりて我の始めて自由の人とあるなり、基督の言給ひし「真理の爾曹に自由を得さすべし」又「子神の子」もし爾曹に自由を賜さば爾曹誠に自由を得べし「約翰傳八章卅二卅六節」との人靈放免の宣告の實に此様を指すなるを知れり。
 我の罪の免されたり、我如何でか隣人の罪を免さるを得んや、神我を愛せり、神の愛我が心に溢れて我の隣の隣人を愛せざるを得ず、

人の神より赦されざる迄の心よりして他を赦さるるなり、富足で徳足るの理由の蓋し此に存するなるべし、有限なる人靈が無限の博愛を以て衆に及ぼさんとする事の望むべくして行はるべきことにあらず、我の益溢れて後我の隣人に我の歡喜の温氣を傳へ得るあり、愛の泉源の神なり、我神に接して後、愛我を充たし而後又我より流れ出るあり。

此主義は反對して常に引用さるる語の實に約翰傳十四章の十五節なり、「イエス曰けるハ、若し汝曹我を愛するならば我誠を守れ(命令あり)と、即ち基督を愛せんと欲するものハ先づ彼の誠を守れとなり、誠を守るハ先きにして愛するは後なり、是即ち余輩の唱ふる救靈の道と撞着するものあるが如し、勿論聖書のその全體を貫徹する精神を以て解すべきものあれば假令二三節句の之に反對の趣意を示すことありとするも余輩の

信仰の變せざるなり、然れども此節を解するに前後の連結よりすれば基督の完全なる行を以て彼を愛するが爲の必要なる條件とあり、よあらざりしのみ明あり、基督の請求の彼の弟子たるもの感謝の捧物として彼の誠を守るべしとなり、如斯の恩恵を以て救世の基礎とする基督教の教理として最も見易き真理と云はざるを得ず、況んや近世の節句批評學の余輩の援助として來りありて此難句を明瞭に余輩の爲に解するあるに於てをや、「守れ(Terence)は「守るからん」Terence あり、前者の舊來の本文ありしも、後者の最近の批評學者の採用する處にして英文改正翻譯の之に依て舊來の Keep my commandments を Ye will keep my commandments と變更せり、即ち全節の意の基督の誠を守るに至るの彼を愛する自然の結果なり、彼を愛すれば必ず彼の律に従ふに至るべしとなり。」第二の難句として余輩の前に常に引證せらるるもの約翰第一

書四章二十節の半節既に見ところの兄弟を愛せずして未だ見ざる神を何で愛せん乎あり、余輩の信仰に反對するもの曰く、是れ實に愛隣を愛神の前に置くものにして神を愛せんとするもの先づ人を愛すべしとの教訓なりと。余輩の云ふ、此半節を以て恩恵説(Doctrine of Free Grace)に反對するもの詩篇の「愚なるもの心のうちに神なしといへり」の語より「神なし」の片句を取りて聖書の無神論を教ゆるものなりと述べし人と比せざるべからず、讀者の只此節の前後兩三節を一見すれば使徒約翰の意を最も明白に解するを得べし、「我儕神を愛するの彼先づ我儕を愛するに因る」もし我の神を愛すと言て其兄弟を憎む者は是謊者なり何となれば眼に見へざる神を愛するものが眼に見ゆる兄弟を愛せざるの理由なればなり、

基督信者善行の本源の保羅の言へるキリストの我儕の者は罪人ある

時われらの爲に死たまへり、神の之よりて其愛を彰し給ふとの意
 よ存するなり、余輩のものはや道徳上の義務として悪を避け善を爲す
 よあらずして基督の愛に勵 (Sunchei Constraineth) 「強ひられて」されてなす
 なり、即ち我が心足りて餘裕あれば我の世に與へざるを得ざるに至
 ればあり、「我福音を宣傳へずば實に禍あり我善事業に従事せざれば
 實に禍なり、我の心中に存する此溢るゝばかりの恩恵、我若し是を
 他に漏すよあらずれば、我の歡喜を以て破裂せん」とす、我の實に愛
 よよりて疾、わづらふ「雅歌五章八節」ものなり
 われ神と和合してより我よ平和を與へ得ざりし學問も今の再び無限
 の快樂と慰藉とを我に給するよ至れり、宇宙の眞に壯麗なる大美術
 となりたり、

I fear no more. The clouded face
 Of Nature smiles; through all her things
 Of time and space and sense I trace.

The moving of the Spirit's wings,

And hear the song of hope he sings. —Whittier

我もはや懼れず、
 曇りし自然の面かげも
 今の笑を含みけり、
 限りあるもの、朽ちるもの、
 感じ得るものすべて皆、
 觸る聖靈の羽音して
 希望の讚美唱へける。
 歴史の大戯曲として味ふべく、地球の大花園として眺むべし、憂鬱
 の中に沈澱せし余の生涯、今の春蕾と共に動き、蟄虫と共に萌蘇し、
 生命の重荷にあらずして快の快たるものとされり、今の見るもの聞
 くもの一として余の注意を惹かざるのあし、

Christianus sum; nihil in rerum natura a me alienum puto.

我の基督信徒なり、人と自然に關する事にして我が心實なる
攻究を要せざるものあり、

何となれば是みな我儕の屬にして、我儕のキリストの屬、キリスト
の神の屬あればなり(哥林多前書三章二十一、二十二節)
義務其苦味を失ひてより仕事の苦痛ならざるに至る、額に汗して食
を求めざるべからざる罪人も今の安心喜樂の中に神の賜物を受くる
に至る、經濟學者の稱する「勞働の荷擔なり」(Labor is onerous)との言の變
じて「勞働の快樂なり」と云ふに至る、此十九世の繁忙社會に於て誰か
永久の休息を永久の勞働の中に欲せざるものあらんや、今の人の休
息、休息と絶叫するものなり、過勞の彼等の最も懼る、ものあり、
職工の勞働時間を一日八時間に縮めんが爲めに同盟罷工をなしつ、
あり、學者の疲勞を怖れて鴻雁の春秋と共に南北に移轉するが如く

寒熱に追ひれながら年中逃廻りつゝあり、而して勞働の主なる基督
の僕にして然も牧者の任を辱ふするものも疲勞てふ惡魔に強迫せら
れて、惡疫、羊を犯すも拘らず、神の聖殿の寂寞として人なきよ
至るよ關せず、疲勞せりとの一言の九鼎の重きを有する理由とあり、
世の怠惰憶病者の眞似を爲して山に走り込み海濱は惰眠を貪るに至
りし十九世末期の現象あり、今世の人の勞働の爲めに疲勞しつゝ、
あるのみならず亦た疲勞せんとの心配より疲勞しつゝ、あるなり。
疲勞の筋肉及び神經の過度使用より來るの少くして精神の過勞より
來るの多し、筋肉も神經も使用せざれば共に衰弱するものなり、「疲
るよりの磨消せよ」(Better to wear out than to rust only)使用せざる
筋力も錆枯
るあり、勞働するよ勝る攝生法のあるなし、心配の毒物の長にして
疲勞の病の大原因あり、ソロモン王曰く
心のたのしみの良薬なり

靈魂のうれひの骨を枯す (箴言十七章廿二節)

而して心配の原因の充たざる責任の念あり、若し借財の人物伸長の最大妨害なりとならば、罪の念即ち神に對する借財の無限の生を有する人靈の活動に及ばす最大障礙たるや明かなり。

罪より赦されて我等の勞働するも疲勞せざるに至る、ヘルキユレスの如き活動力の我等が主耶蘇基督を信じてより來る、

疲れたるものに力をおたへ、勢力なきものよの強きをまし加へたまふ、年少きものもつかれてうみ、壯あるものも衰へか

るふ、然のあれどエホバを俟望むものの新ある力をねん、また

驚のごとく翼をはりてのぼらん、走れどもつかれず歩めども倦ざるべし、 (以賽亞四十四章廿九、三章卅一節)

兩肺朽去て尙は意氣自若として救世に従事せし故澤山保羅、過敏神經を印度の熱風に暴しながらベルシヤ語に聖書を翻譯せしヘンリー

|| マーチン、英國の汚穢を排除せんが爲よ山の如くなる外患内寇に

打勝ちつ、猶は八旬の健康を維持せしシモン|| ウエスレー、然り、詩人ゲーテの所謂休むな急ぐな生涯の基督の救と與かりて后始めて達し得べきなり。

然り天道の非ならざるなり、我に死の懼怖あり、而して世に此懼怖を取去るの道あり、我に神と共あらんとするの希望あり、而して我

の神に至る道のあるあり、世に不満と不幸とあり、而して之に勝るの歡喜と満足とあるあり、世に苦痛あり、而して之を醫するに足る

の力あり、我の歡樂を以て此地球よ棲息し得るなり、我の靜肅安然に天與の智能を磨き得るなり、我の偽善褻瀆の危険なくして慈善傳

道に従事し得るあり、教導補育せんとする我の妻の快樂ある「ホーム」

を我よ供するあり、基督の愛神主義の利他利己兩主義の上に超越して最も多く他を利して最も多く己を利するの道を我に教へり、我

の罪を自覺して之を選くるを得べし、我の我に附與されし赦免の神の公義は戻らざるものなるを知るが故に我が全性の應諾を以て之に與かるを得べし、我の求めんと欲する處のものにして、天の我に附與せられざるのなし、造化の實に失敗ならざりしなり、エム、マヌエル、神我等と共に在り、人世の一度通過するの價値あり。

贖罪の哲理

宗教の事實あり經驗なり、我儕の聞また見、懇切に觀、わが手捫りし所のものを曰ひ、且つ信するされば、其哲理の如何の我儕の信仰を動かすべきにあらず、幾尼涅の作用に關する病理學上の學說如何

の其下熱劑たるの効用を少しも減少せざるが如く、救罪かとして福音の效果の哲學上の解析如何に據らざるなり、我儕の信仰の背理的たるべからず、然れども神の直感を以て感じ得べきものにして推理的思考の結果として得らるべきものにあらず、一見百聞に若かず、宗教を了得するより第六感の作用と發達とを要す。

故に余の茲は贖罪の哲理を攻究するに當て先づ讀者の注意を乞ひんと欲する事の余の解析如何に依て事實其物を判斷せられざらん事是なり、事實の事實にして解釋の解釋なり、事實の自然にして神のものなり、解釋の余の解釋にして人のものあり、前者の萬世に涉る萬人の實驗に依て證すべく、後者の時と思考者の腦形とに依て變ずべし、さればにや贖罪の哲理(Rationale)に就ての古來より今日に至るまで幾多の假定說(教理と稱せらる)が提出せられたり、或の曰く人類の惡魔の擒となりたれば神の其子を贖代として惡魔の手に渡し、人類を

己が手を取戻せりと、曰く神と人との間も調和を失ひたれば、神人
 両性を備へたる基督の両間の中保人とありて平和を回復せしなりと。
 曰く神の公義の罪人が罰せられずして赦さるゝことを許さず、故に
 神の自ら人類の罪を負ふて彼を信するものゝ罪を赦すの途を開けり
 と、曰く人類の神の愛と慈悲とを忘れ、自ら悔改の途を塞ぎたれば
 神の基督に於て顯れ給ひて吾人の信仰を助け、神に歸るの途を開け
 りと、實に基督贖罪論の三位一躰論と共に神學上議論の燒點にして
 今日に至るも未だ何人をも満足し得る定説あるを聞かず。然れども
 その背理ならざるの證はその是を何れの方面より攻究するも之を合
 理的に考究し得るゝあり、而して今日迄提出せられし贖罪の解析も
 して一も満足なるものあしとするも、亦幾分の眞理を含有せざるも
 のの稀なり、贖罪若し神愛の絶頂なりとせば能く之を了會し得るも
 のの宇宙の廣さが如き博き智と、神愛の深さが如き深き愛とを有す

るものならざるべからず、我等の智識の全からず、余の救罪の奥義
 の何處に存するやを知らずと雖、若し余にして此奥義を窺ひ知り得
 るに至らば、これ使徒保羅が彼の奇跡的の智能を以て羅馬人に書き
 送りし書簡の中に彼の註解を試みし以來、基督教二千年間の史上も
 於て幾多の聖者の腦漿に上りし解析を總合(Sum total)せしものならむと
 信す。

余が十字架上の耶穌を見し時始めて罪の荷擔を脱するを得し抑々
 何の理由に依るや、余は茲に簡短明瞭にして救靈の奥義を一括する
 哲理を述ぶること能はずと雖も、余の余の大傷の癒されし理由を考
 へ見んと欲す。然れども讀者よ、同一の藥品が異種の病に適するこ
 とあるもその作用に至りての病に依て異なるが如く、我の病を有せざ
 る人が我が如く感ぜざるの理の最も見易きものなり、我の理由必し
 も汝の理由ならざるべし、余の前以て斯く述べ置くなり。

此問題を攻究するに當て先づ余輩の注意すべきの眞理探究の途として信仰なる能性の欠くべからざる事是なり、聖アウガスチン曰く「信仰との吾人の未だ見る能はざることを信するにあり、而して此信仰の果報たる吾人の信せしことを見るにあり」と、余の見ずして信じたれども信じてより見るを得るに至れり、余の十字架を信じ能はざりし其理由を解せざりしに依れり、余の思へり若し十字架の代贖にして充分に理解し能はざるものならば余の如何にして之を神経病的の「リバイバル」より區別し得るや、余の合理的の宗教を求むるものなれば理を解せざる事實を信する能はず、余の肇る眞理を信じて困しむも迷信を信じて安逸を求めざるべし、Better one year of Europe than a cycle of Cathay、歐洲動搖の一年のサセイ千年の無事に勝る、余の眞理を犠牲に供して平安を求めざるべし」と。

然り然れども余の此宇宙間への信仰を以てのみ知り得る眞理の存在

する事を忘れたり、而して諸ての智識の土臺ある物の自然(the nature of things)の信仰に依てのみ知り得るあり。何故に薔薇の香はしきや、其花蕊は香油の存すればなり、何故に香油の香はしきや、是推理の終局あり。葉緑の青さの其成分を知ればとて解し得べきよあらず、葉緑の青ければ青しと言て止まるのみ、然ども一度葉緑の青さを知てより植物界の現像を思ひ見れば、松の鬱蒼たるも解し得べし、楓の血紅たるも解し得べし、アルプスの深緑、アンデスの薄藍、皆な單純なる葉緑粒の變幻なるを知るに至る。

造化を見も又如斯、脳神を神と信じてのみ宇宙の中心の周圍に回轉する一大機關たるを知るを得るなり、眞理の眞理其物の證なり、神の神たるを證するもの神を除て他に存するなし、神に向て汝の存在の證を與よと言へば我の我まり「I am that I am」と答へ賜ふより外なし、物の自然を信じて素めて其物に關する智識あり、宇宙存在の始

大原因なる神を信せずして宇宙を解し得るの理あらんや。哲學者ヲ
イフニツツ曰ク

心靈以外のものよして直接に知認し得るもの神のみ、感觸を
以て探るべき外物の皆悉く間接にのみ知り得べし、

然らば迷信(Superstition)と信仰(Faith)との別何處に存するや、理を究めず
して信すればこそ蠟の頭も崇めらるゝにあらずや、神てふ感念の迷
信家の熱頭中に描かれたる妄想ならざるの證の何處あるや。

信じて而して眞理益々明瞭なるを得る之を信仰と云ひ、益々闇黒を
加ふるに至る之を迷信と云ふ、眞理の我の自然性と調和するものな
るを以て之を信すれば我が全性の歡喜と賛成あり、誤認の我自身の
和合を破るものなれば我が善性の全部或の幾分かを壓せざるべから
ず、充分なる満足の眞理を了得せし時の徵候なり、われ眞理を會得
する時、我の理性も情性もアーメンと應へ、山と岡との聲を放て前

よ歌ひ、野にある樹のみな手をうたん(以賽亞五十五章十二節)アルキ
メデス比重量の標準を求め得て裸躰躍り出て衆に告げ、シヤムボリ
オン假説を設けて「ロゼツマ」石を譯解せしよりバロの木乃伊再び物を
語る、我の眞理に達せんとする時、我の心よ存する眞理の叫び言ふ
「彼女の私の姉妹あり」と、靈、靈に應じ、眞理、眞理と婚す、天の許せ
し夫妻の人の以て離別し得べきにあらず、眞理、眞理を戀ひし後の
合せざれば止まず。

For deep love unsatisfied is the hell of noble hearts and a portion for the
accursed, but love that is mirrored back more perfect from the soul of our desired
doth fashion wings to lift us above ourselves and make us what we ought be.

—Rider Haggard.

迷信信仰の別此の如し、然り我の我が牧者の聲を知るなり。
福音書の記載する基督の言行録が特種の引力を以て罪に困しむ人羣

を彼に引き附る所以の全く此よ存すると信するなり、基督の心算の新郎にして新婦の「インスチメント」の直に問はずして彼の眞夫たるを知る、眞理を探るに至つて此種の能性の決して輕す可らざるなり。

“Whose (man's) halting wisdom after knows,

What her (woman's) diviner virtue fore discerns.”

われ我が罪を悔ゆると雖も我を赦すの神なかりせば如何せん、放蕩子悔いて家に歸るとも彼を見て憫み趣り往き其頸を抱て接吻する。我のなかりせば彼の何の面目と勇氣ありて父の許に來らんや、我の我の罪に耻て神に歸る能はず、我の心よ存する罪の我を遮て我の神に歸するを許さず、人類の已に神の面前より逐われしものよして旋轉る船の剣の生命の樹の途を守れり(創世記四十三章廿四節)、神若し我を救へんと欲せば彼より我に來らざるべからず、われ罪を犯さざり

父

し前の正義の神の我の友にして我の直に彼と交へるを得あり、然れども已に罪もて汚されし我の今の正義の神の光輝に堪へざるなり、純白の衣裳を着けたるものよみ神の國に入るを得るあり、泥だらけなる我、傷だらけある我、如何で彼の前に立つを得むや。

此よ至て我の贖罪の必要を感ずるあり、即ち我罪人が神に達し得るの途を欲するあり、罪人ある我が神と平和を結ばん爲にの神の正義の神としてのみ我よ現れずして、慈悲の神、救の神として現れざるべからず、彼の子供ある人類の自ら好んで罪惡の奴隷とありたれば、彼の愛をして此迷へる子供に普及せんが爲めに、神の救主として自顯せざるべからず。

基督が非常の引力を以て人を彼よ引寄するの全く彼が此人性の大慾望を充たせばなり。

彼の道德の完全ありし勿論彼が尊崇せらる、一大理由あるに相違

なし、神の獨子ひとりごありとして、彼を嘲りしストラウスすら彼の行性を評して曰く、ソクラトスの人の如く死せり、基督の神の如く死せりと詩人ゲーテの如く、基督教を論ずるや常に皮想ひきそうの見を以てし、惟美術的のみ人世を解せし人すら基督の品性しんせいに就て、かく表白せり、理性の發育の如何程進歩するとも、學術の研究の如何程細奥を極むるとも、人智の開發の其極に達するとも、福音書中に輝く基督教の高尙こうじやうある道德が超越てうごうさるゝことの決してあるべからざるなり、

基督の神性と奇跡とを批難する人も彼の高潔無垢の品性しんせいに就て、狂信家きやうしんかよあらざるより、之を否むものあるを聞かず、宜なるかなユニテリアン教徒の如く、基督が教主たるの理由の單に彼の完全無欠の品性しんせいにありと信するものありと。高潔なる品性が救罪上の力を有する事の論を俟ずして明かなり、英

雄ゆうに一種の電氣力あり、われ彼に近けば彼の英氣我わがに感染す、倫理學を講ずるよあらずして活ける倫理に接する時の眞理の清流我わがに注入するを覺ゆ、ソクラトス最後の狀を讀む毎に釘もて机に打付けられし如く沈思默考石像の如く靜肅ありしベニオンあり、護良親王吉野籠城の記事を誦讀して常に士氣を鼓舞せし藤田東湖あり、万巻の書を以て教訓し能はざる粗暴男子も一度ラグビー校のアーノルド氏に接すれば終生離るべからざる温雅の風を受くるあり、君子の實に活佛にして歴史の活ける哲學なり。品性の模範として基督の最も完全なるものなり、人若し絶間なく基督の品性を見詰め彼に模範と欲せば終に彼の完全なるが如く完全なるを得べしとの或種の宗教家が熱く唱ふる處なり、(ヘンリー・ド・ラ・モント氏演說集中 The Changed Life の編を讀め)、基督の如くならんと欲すとの慾念こそ基督信徒の最大目的あり、而して基督を思ひ基督を

學び以て益々基督に似るに至る事の疑ふべからざる事實なり。
 然れども余に基督の如くなり能はざる大原因のあるあり、即ち余に
 の罪てふものゝ存するありて如何なる感化力も之を消滅し能はざる
 あり、余にして先づ罪より免からるゝにあらざれば余の基督の如く
 思ひ且つ行ふ事能はざるあり、基督の心を以て余の心となさんと欲
 せば先づ余の心は一大變化(性質上の)を來たさざるべからず、基督の
 贖罪なくして人の基督の如くなり得べしと謂ふの石鹼と磨擦の作用
 は依て黒人も白哲人種とあり得べしと謂ふが如し。
 基督救世の業の二様あり、一は人類に完全なる生涯を教へんが爲
 なり、二は人類の罪を彼の身は負て之を消滅せんが爲なり、前者の
 救世の最終目的として、後者の前者は導きの必要手段なり、(彼得前
 書二章十二節)、完全なる人を作らんと欲せば先づ人を不完全ならし
 むる罪を除かざるべからず、何とされば人その罪より脱せざれば罪
 を犯さざるに至らざればなり。

然れば何故に基督の死と苦痛との彼を信するもの、罪を滅するや、
 世に稱する贖罪あるもの、哲理の何處に存するや、人の他人の苦痛
 に依て自己の犯せし罪より免かるゝを得るや。
 此問題を攻考せんとするに當て余輩の先づ諸ての善人の贖罪的の性
 を有するものあることを認めざるべからず、人類の聯帶責任を以て
 共に繋がるゝものなり、一人の罪の人類擧て之を感じ、一國の失政
 の萬國の損害となる、我の兄弟が罪を犯して我の責任なしと謂ふを
 得ず、我が同胞若し損害を他國民に加ふれば國民の擧て其責は當ら
 ざるべからず、罪なきものが罪あるもの、罪を負ふにあらざれば其
 罪の消滅せざるべしとの天下普通の道理あり、米人利慾の奴隷とな
 り、人倫の大綱を破り、賣奴の制を實行せしや、義人ジョン・ブラウ
 ンのハリズ渡口の絞罪臺に於て罪祭の捧物として供へられたり、つ